

書物の未来 和田敦彦 2

* 特集

大学出版部の本棚 I

『バツタ・コオロギ・キリギリス大図鑑』

(日本直翅類学会編) 盛口満 8

『今を生きる 東日本大震災から明日へ！
復興と再生への提言 1 人間として』

(座小田豊・尾崎彰宏編) 鶴田清一 10

『光の子と闇の子』

(R・ニーパー著) 佐久間重 12

『伊東俊太郎著作集 第11巻
対談・エッセー・著作目録』 立木教夫

14

The languages of Japan (Masayoshi Shibatani)

ジャーケ・フレレスビッグ 16

『日本経済 その構造変化をとらえる』

(田中隆之編著) 竹内宏 18

『関東の仏像』(副島弘道編) 多田孝文 20

『現代米国税務会計史』

(矢内一好著) 八ッ尾順一 22

『聞き書 南原繁回顧録』

(丸山真男・福田歓一編) 外岡秀俊 24

『アメリカ仏教』

(ケネス・タナカ著) 末木文美士 26

『両親教育』(見玉九十著) 森下恭光 28

『ダーウィンフィツシュ』

(ダニエル・ボリー著) 武藤文人 30

『涼山彝族の言語と文字』

(福田和展著) 荒井茂夫 32

『緒方洪庵全集』

第一巻 扶氏経験遺訓 上
第二巻 扶氏経験遺訓 下

(適塾記念会緒方洪庵全集編集委員会編) 村田路人 34

『わかりやすい刑罰のはなし』

(永田憲史著) 松尾誠紀 36

『バンジャマン・コンスタン日記』

太田一昭 38

* 連載

初版本、ナンセンスなフエティシズム

福澤諭吉著『改暦辨』 酒井道夫 表2

大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

一般社団法人
大学出版部協会THE
ASSOCIATION
OF
JAPANESE
UNIVERSITY
PRESSESNO. 93
2013. I
* 冬50th
Anniversary

■ 目 次

書物の未来

和田敦彦 2

* 特集・大学出版部の本棚 I

『バッタ・コロギ・キリギリス大図鑑』（日本直翅類学会編）

盛口 満 8

『今を生きる 東日本大震災から明日へ！ 復興と再生への提言 1 人間として』（座小田豊・尾崎彰宏編）

鷺田清一 10

『光の子と闇の子』（R・ニーバー著）

佐久間重 12

『伊東俊太郎著作集 第11巻 対談・エッセー・著作目録』

立木教夫 14

The languages of Japan (Masayoshi Shibatani)

ビヤーク・フレレスビッグ 16

『日本経済 その構造変化をとらえる』（田中隆之編著）

竹内 宏 18

『関東の仏像』（副島弘道編）

多田孝文 20

『現代米国税務会計史』（矢内一好著）

八ツ尾順一 22

『聞き書 南原繁回顧録』（丸山真男・福田欽一編）

外岡秀俊 24

『アメリカ仏教』（ケネス・タナカ著）

末木文美士 26

『両親教育』（児玉九十著）

森下恭光 28

『ダーウィンフィッシュ』（ダニエル・ポーリー著）

武藤文人 30

『涼山彝族の言語と文字』（福田和展著）

荒井茂夫 32

『緒方洪庵全集 第一巻 扶氏経験遺訓上／第二巻 扶氏経験遺訓下』（適塾記念会緒方洪庵全集編集委員会編）

村田路人 34

『わかりやすい刑罰のはなし』（永田憲史著）

松尾誠紀 36

『バンジャマン・コンスタン日記』

太田一昭 38

* 連載・初版本、ナンセンスなフェティシズム

福澤諭吉著『改暦辨』

酒井道夫 表2

書物の未来

和田敦彦（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）

過去の書物を作る

今年の夏に、ちょっとかわった仕事を引き受けていた。私はおもに、読者や書物の歴史に関心をもつてこれまで研究してきたのだが、今回の仕事は、昔の書物を「作る」というものだった。ある映画の小道具の制作協力ということで、その映画の中で用いられる明治期の新聞や書籍を作るわけである。明治十年代のはじめ頃という設定だった。そして、それら新聞や書物を読む場面もあったため、小道具は外見だけではなく、文章自体も当時風に「翻訳」する必要がある。

明治期の新聞や小説は、仕事柄よく使うので読むことも多いのだが、作った経験はない。不自然にならないよう、同時期の文献とつきあわせながら作っていく作業は面倒なものではあったが、気づかされたことも多かった。ちよう

ど、ふだん使っていない筋肉を使って運動するような、貴重な機会となったように思う。

明治十年代となると、本の形態としては様々な可能性がある。板木による整版で作られた板本もまだ十分流通していたし、金属活字によつて印刷された書物も存在している。あるいは体裁はそれまでの板本のようでありつつ、文字は活字で構成している新旧折衷した形の本も多い。和装本で刊行される本もあれば、厚手のボール紙を用いた簡易な洋装本も数多く作られてくる時期でもある。

書籍の形のみではなく、文体もまさに新旧織り交ぜて存在している時期であり、近世の戯作の文体から、大衆向けの小新聞に見られるような口語性の強い文体まで、多種多様な選択肢がある。こうした中から、ちようど人物や状況の設定に適したもの、無理のないものを選んでいく。むしろそれはあくまでこちらからの提案であり、実際には映画

の観客へのわかりやすさや、演出とのかねあわせで変わっていく。

とはいえ、いざ作るとなると、分らないこと、はつきりしないことが多い。例えば文字一つとってもそうである。明治十年代には、全国各地で新聞がすでに発行されており、総ルビの口語調で、今読んでもわかりやすい新聞も数多い。だが現在と異なり、活字には変体仮名がまだ多い。「な」「た」「に」「か」といった平仮名は、たいてい二種類の活字が用いられている。だが例えば二種類の「な」（な／ふ）をこの時期ではどう使い分けるか、などといった研究などありはしない。結局、使い分けの大まかなルールを自作し、一定数の異体字が交じった当時風の字面を作ることにした。いざ作るとなると、これ以外にも書物のジャンルと装丁の関係から、文章の句読点、ルビの用い方まで、書物のことを知っているようで、実は十分明らかになっていないことも多々あることに気づかされた。

また、この仕事を通して意識させられた大きな点がもう一つある。明治期の新聞や書物は数多く残っており、それは今やデジタル化されて容易に見ることも可能になっているものの、それらをどのような場所で、どのような人々が、どのように買い、読んでいたのか、といったことについての研究は多くはないということだ。しかし、映画の中で具体的にそれらの新聞や書物を用いる場合には、これは決定的に重要な情報になる。モノとしての書物のみならず、

それを取り巻く空間、読む人々を想像しなくてはならない、その具体的な機会を与えてくれたわけである。

読書の歴史に関心を向けている自分自身も、いざある時期の読書空間について具体的に再現しようとしてみると、実に穴だらけの知識しかもっていないことを痛感させられる。私達は、当たり前のように書物に接しているが、私達が書物と取り結んできた関係と、その変化については、あまり関心を向けていない。

書物の未来と題しつつも、私はここで過去の書物や読者について書いている。というのも、私には常に以下のような疑問がつきまとっているからだ。未来の書物や読書について語る以前に、私はどれだけこれまでの書物や読者について知っているだろうか。未来の予測や想像、批判や評価の土台となる、書物や読者の歴史について。

「函」の役割

私は何も過去の読書文化への郷愁にひたりたいわけではない。紙の書物や、さらにはそれを蔵する具体的な空間、書店や図書館に過度の愛着をもっているわけでもない。デジタル化された書物や雑誌に抵抗感はなく、その便利さを身にしみて経験してきた世代でもある。自身でも北米を中心に、海外の学術図書館のデジタル・ライブラリの取材や調査を行ってきたこともあり、書物の物理的な形や、それを収める書庫や場所といった概念にとらわれない、新たな

読書環境を作り出す試みに、魅力を感じてもいる。

電子ジャーナルをはじめとした具体的な形や場所をもたない学術情報、図書館の重要なインフラの一部とさえなり、その一方でこれらの購入、支出が各地の学術図書館を圧迫しているのは衆知のことである。この二年間、自身の勤務する大学で図書館の仕事と兼務したこともあって、こうした問題がもはやまったなしの深刻な状況にあることも思い知らされた。図書館の仕事と関わることで、新たな形をとりつつある書物について考えさせられる機会は多かったが、そうしたときに、私が意識させられ、そして気づかされたのは、むしろ図書館という具体的な場所や、書物という物理的な存在、そしてそれらを支えている棚や書架、総じて言えば物理的な「函」の重要性だった。

もともと学問や知は物理的な形をもったものではないし、それを図書館という形に整理、分類して押し込めることは、ある意味無理があるのも確かだ。けれど、わかりやすい形があるからこそ、私達はそれを批判したり、発展させたり、場合によっては壊したりすることができる。カオスのような膨大な情報が、物理的な場所を占めることなく果てしなく連なった知の体系の中で何かを作り出したところで、それを評価するのも伝えるのも難しい。特に、初学者にとっては、具体的な広さと物理的な限界をもった場所で学んでいくことは、自身で研究できるようになるまでの大事な補助輪のように機能する。

図書館の棚はそうした「函」のよい例である。関連する研究書が棚という一定の範囲内に「見える」「並んでいる」ことが、どれだけ私達が研究してきた中で役立ってきたとか。研究しながら、私達は棚を読み、棚に示唆され、教わってきた。長い時間をかけて選び、蓄積された書架は、その図書館の作り出した作品に他ならない。もちろん、この作品は必ずしも公開されているとは限らない。利用者の請求に応じて職員が図書を出納する、国会図書館のようないわゆる閉架式の図書館もある。

だがこれはもったいない話で、私はかつて国会図書館で働いている知人に、国会図書館の棚の写真を撮影して何かに利用できないかを提案したことがある。その際には、棚を動画ではしからはしまで撮って、ホームページや待合スペースで流してはどうか、といったことを話していたものだった。

常に形を変えつつ、そしてまた決して残ることのないこの作品には、大規模な空間が必要だ。現在では北米の大規模な学術図書館で、利用者がこの作品を見られるいわゆる開架式の図書館は多くはない。遠隔地に大規模な倉庫を設け、機械操作で請求された書物の出納を行うわけである。

「函」を、単に書物を収納し、管理するものだと考える限り、それで十分事足りる。記録された番号で所在さえ把握できれば、もはや背表紙が見える必要さえもない。しかしながら、「函」の果たしていたそれ以外の役割、例えばこの場

合で言えば棚が果たしていた視覚的な役割は決定的に失われてしまったわけである。

知に具体的な形状や仕切りを与えるこうした「函」の役割は、様々なレベルで考えられると思う。装丁や棚のレベルから、書庫という空間、さらには図書館という「函」や、図書館自体を包むキャンパスや街というレベルまで。私達は書物に接する際に、書物の内容のみを読んでいるわけではなくて、これら膨大なガイドラインに教わり、寄りかかりながら読んでいるのだ。書物の内容のみがデジタル化される際には、これら膨大な「函」の情報は欠落してしまう。ある程度体系的な読書経験を積んでいればその情報を補うことができるけれど、そうした経験が浅い場合、どの本をどこで選び、それをどう評価するかが分からなくなる。

際限のない情報に、物理的な枠組や限界を与える「函」を、私はフィジカル・アンカーと呼んで、それが読書という行為の中で重要な役割を果たすことを強調してきた。情報を評価する、あるいは理解するとは、ちょうどある本を、私達の内なる書架の特定の場所に収めるような行為なのだ。私達はそうした内なる書架を、様々な外にある「函」との関わりの中から作り上げてきたのではなかったか。

新たな仲介者

書物、あるいは書物に含まれる情報と、それを求める読者とを、うまく出会わせる仕組みは、長い時間をかけて洗

練され、改変されてきたものである。そうした仕組みには、物理的なモノとしては先の書架や書庫といった「函」があるが、書物と読者の仲立ちとなる様々な人や組織もまたそうした役割を担ってきた。「函」とともに、この仲介者の役割や存在が、書物の未来においては鍵になると私は考えている。先に私は、書物の未来を考えるには、まず書物のこれまでを知らねばならないと述べたが、こうした「函」や仲介者のこれまで果たしてきた役割をこそ今一度見直してみる必要がある。

私達は、これまで書物を独立したモノとして、それだけで永続するような自立したモノとしてとらえずにはいないだろうか。しかし書物はもっと脆弱な存在かもしれない。これまでも、これからもいろいろな人や組織によって支えられ、様々な「函」によって支えられ、はじめて存在するような。伝統的な「函」が姿を消し、膨大な情報が多様に散在する状況では、書物を支え、そこに導いてくれる信頼できる仲介者の責任が大きくなる。

現在、国内外をとわず、多くの学術図書館では学術情報リテラシーについての向上にむけた取り組み、簡単にいえばどのように図書館や、そこでの学術情報を利用するか、といった利用者講習に力を入れている。それは、何より、こうした書物を支え、とりまいていた補助情報が、すなわち「函」が見えがなくなっていること、そして仲介者が新たな積極的な役割を担うことでそれを補っていることを示

している。学術情報は、それまでの学術情報の膨大な蓄積を知り、評価しなければはじまらないからこそ、その入り口や順序、段階を効率的に知るための支えが重要になる。そしてその学術情報は、同時にあらゆる情報の位置づけと深く関わり合っている。インターネット上の玉石混淆の情報を、信頼性や重要度で仕分けしていく際の尺度や基準になるのは、学術情報だからだ。

書物も読書もその形を変えてゆくであろうし、それがよいか悪いかは、立場次第である。出版社にとって、あるいは書店にとってのよいことが、読者にとってよいとは限らないし、その読者の立場もまた多様なものだから。むしろ重要なのは変貌する書物や読書に対して、私達が評価し、批判する力をどう身につけていくか、なのである。私達は書物のみならず、書物を支える「函」や、書物に導く人が読書の歴史の中で果たしてきた役割を今一度見つめ直し、掘り起こし、考える必要がある。その意味で、過去の読書を学ぶことは、未来に向けた最良のリテラシー教育だと私は考えている。

ただし、このことは例えばモノとして過去の書物を崇拝することを意味するのではないし、紙の書物による読書体験をノスタルジックに価値づけることを意味するのではない。そのような態度は、現在の「函」や仲介者の役割、機能から目をそらすことにしかないだろう。

かつて「函」や仲介者が担ってきた役割は、現在では各

種情報端末やそのOS、あるいは書籍データを仲介する各種検索エンジンが担いつつある。これらハードやソフトの機能の変化や革新は、書物そのものの意味や価値をも変動させていくことだろう。先に述べたように、書物は、読者との間をとりもつ様々な仕組みに依存し、支えられてきたもののだから。だが、こうした現代の「函」や仲介者は、技術的に複雑であり、かつまた、特定企業に占有され、その仕組みが外側からはクリアに見えないものと化しつつある。

過去の読書において、書物と読者を取りもつ役割は、場合によっては販売者や教育者が、あるいはまた監視者や検閲者が担ってきたものである。現在の、そして未来の読書において、こうした役割はどのような形で読書の技術の中に織り込まれているのだろうか。そうした問いを差し向けるための手がかりを、私達は過去の読書から見つけていくべきなのだ。そうした問いを忘却したとき、私達がどのような危うい状況に置かれるか。これもまた、読書の歴史が私達に如実に示してくれる通りである。

特集

大学出版部の本棚 I

研究と教育の成果である大学出版部の刊行物は、最も良質な知の宝庫。大学出版部協会創立五〇周年の記念号となる今号と次号の特集では、そのなから、各出版部のイチ押しを識者に選定のうえ書評させていただきます。ホンモノのブックガイドとして、お楽しみください。

■私が薦める北海道大学出版会の本

『バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑』（日本直翅類学会編）

盛口 満（沖縄大学人文学部准教授）

人によって苦手なものがある。

僕の場合、英語がどうにも苦手だ。勉強不足は認めるが、それだけでなく、体質的にどうにもあわないのではないかと思う。だから、海外旅行もおつくうである。英語の本を読むなんて、とんでもないことである。ところが、あれこれ興味のあることを調べていくとすると、どうしても日本語の文献だけではすまされない。やむなく辞書を片手に英語と格闘しているうちに、気が付いたことがあった。「英語ができるようにならなくてもいいのだ」と。

学生時代から、「英語はできるようにならなくてはならないもの」という思い込みがあった。そうではないのだ。

英語ができるようにならなくたって、辞書があれば、英語の文献は読み取れるのである。そして、目的は英語を話すことではなく、知りたいことを知ればいいということだから、それでかまわないのだ。そう思うと、英語嫌いが治

ったわけではないけれど、英語の本にも尻込みをしなくなつた。心強い味方である、辞書が傍らにある限りにおいてはあが。

同じことが、自然を見る時にもあてはまる。

僕は小さなころ、貝殻拾いから生物に対する興味を持つた。それ以降、キノコや植物、昆虫や動物の骨格など、様々な生物に興味を持ってきたのだが、それでも苦手なものが存在する。そのひとつが、専門的に、直翅類と呼ばれるバッタ、コオロギ、キリギリスといった昆虫たちだ。

語学の習得と共通するのは、音声認識が苦手ということにある。コオロギやキリギリス類の特徴はなにより鳴き声によるコミュニケーションを発達させたことだが、僕はど

うも鳴く虫の声を覚えきれないのである。

また、貝殻拾いから始まった自然への興味が影響しているのか、僕は「とっておける標本」への嗜好がある。これ



(2006年, 52500円)

に対して、直翅類の体は柔らかく、標本として保存することが難しい。

こうしたことから、僕は、直翅類にどうしても深い興味を持つことができなかった。

ところが、二〇〇六年に出版された本書を読むと、「直翅類が苦手であってもいいのだ」と思えるようになる。なぜかといえば、直翅類オンチであっても、いざ必要な場合は、この図鑑を使えば、自分で直翅類の名前が調べられると思うからだ。

例えば、プロなら、文章による記載や検索表からだけでも種の同定が可能であろう。しかし、素人や、まして苦手意識があるものにとつて、そうした情報だけからの同定は、あまりに壁が高い。ところが、いい図鑑というのは、そのような苦手意識のある者にとつても使いやすい。まず、日本産の直翅類が網羅されて紹介してあることがうれしい。図鑑で虫の名前を調べていて一番のストレスは、「載っていない種類かもしれない」という懸念であるからだ。なに

しろ、知識がない。だから、図鑑を見て、絵合わせをする。そのときに、「この図鑑のどこかに載っているはず」と思えるのは、なんといつても心強いことである。

また、掲載されている標本写真が美しい。直翅類は、体が柔らかいこともあって、キレイに乾燥標本にすることが難しい。特に体色が残りにくい。知人の直翅類研究家は「直翅類の標本は、漢方薬みたいになつてしまふ」と言うほど。だからこれだけ美しい標本写真の直翅類図鑑の登場は、驚きである。もちろん、写真が生体に近ければ近いほど、同定は容易になる。加えて、オス、メスそれぞれごとに、近縁種との識別点が線画によつて図示されていたりもする。直翅類がキライでもかまわない。この図鑑さえあれば、いざとなつたら、直翅類の名前を調べることができる。そしてどれだけ、自分にとつて、未知の世界が残っているのかを確認できる。いつまでたつても、直翅類オンチは治らないだろうが、ひよつとすると、本ぐらいいは書けるようになるかもしれないと思うのである。

連想の文体

王朝文学史序説

鈴木日出男

歌言葉の連想に依拠しつつ独自の批評を加えることで誕生した連想の文体という観点から王朝文学史を捉え直す。

A5判・定価9450円

〈徒弟〉たちのイギリス文学

—小説はいかに誕生したか—

原 英一

自己の欲望と社会のシステムに挟まれた「徒弟」たちの葛藤のドラマ。文学史に新たな展望を切りひらく。四六判・定価3885円

東アジア 法文明圏の中の 日本史

深谷克己

古代から近代初頭に至る日本史の流れを、「政治文化」論を切り口として東アジア世界の中で位置づけ直す。

四六判・定価3360円

蒋介石の 外交戦略と 日中戦争

家近亮子

猜疑しあう歴史を超える“希聖の種子”を求めて。

四六判・定価2940円

【岩波テキストボックス】 社会学原論

宮 島 喬

社会学の存在理由を問う渾身の書き下ろし。

A5判・定価2520円



岩波書店

東京・千代田・一ツ橋

〔定価は消費税5%込み〕

<http://www.iwanami.co.jp/>

■私が薦める東北大学出版会の本

『今を生きる』 東日本大震災から明日へ！
復興と再生への提言 1 人間として

(座小田豊・尾崎彰宏編)

鷺田清一 (大谷大学文学部教授)

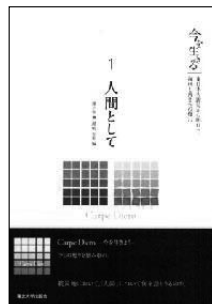
途方もない震災。貞観の激震以来いくどかの大震災の記録が残されていたとはいえ、現代の東北のだれもがじっさいに体験したことのない、途轍もなく広い地域にわたる甚大な災害。そこにあるのがあたりまえであった風景、それを前提に日々の暮らしを丹念に編んできた家族の関係、地域の結びつき、職場のネットワーク、そして集いの場、折りの場。それらが根こそぎなぎ倒され、洗い流されたのが、このたびの「東日本大震災」である。

被災地の方々の心身に重くのしかかる復旧・復興作業のさなか、その被災地にある東北大学大学院文学研究科の現役教員の方々によって、この論集は編まれ、執筆された。

文学研究科は人文学の拠点である。そして人文学とは、天文学とともに今なお「文」を冠する数少ない学問である。「文」とはもとと綾、筋、模様といった意味をもつ語である。天文学、地文学、人文学とかつて大きく三つに区切

られた学問は、それぞれに天・地・人の仕組みとか構造についての学問としてあった。本書は、東北大学出版会が亡くなられた方々の「鎮魂」と生き残った人びとの「希望」のために編むことにした『今を生きる 東日本大震災から明日へ！ 復興と再生への提言』というシリーズの第一巻となるもので、「1 人間として」と題されている。

「まえがき」で記されているように、大学のスタッフが同時に一個の「人間として」何を語りうるのか、語るべきなのか、亡くなられた方々、被災された方々にどのように寄り添うことができるのか、一人ひとりがそうした問いを共有しつつ、それぞれの学問分野から、未完ではあれ現時点で出しうるぎりぎりの言葉を紡ぎだしている。哲学、倫理学、宗教学、日本思想史、国文学、美術史、心理学、言語学の研究者たちが、それぞれに、言葉を失うという経験を超えて、これらの問いに真摯に向き合う。



(2012年, 2100円)

日本人にとって「満洲」とは
何だったのか？

二〇世紀 満洲 歴史事典



貴志俊彦・松重充浩・松村史紀編
三期構成・約800項目を収録！満
洲100年の歴史がわかる決定版！
14700円 〔内容案内〕送呈



日本 石造物 辞典

日本石造物辞典編集委員会編 約
1500の石造物を都道府県別に収
め、関連用語も解説した待望の辞典。
21000円 〔内容案内〕送呈

環境の日本史 全5巻刊行開始

●日本史と環境

平川 南編 一人と自然—
歴史から導きだす、新たな自然観・
環境観。(第1回配本) 4515円

●人々の営みと 近世の自然

水本邦彦編 自然の大改造と災害
復興。自然といかに向き合ってきた
のか。(第2回配本) 5040円

近代日本の メディアと 階層認識

石堂彰彦著 近代日本における階
層認識の形成と変遷を、新聞という
メディアを分析し解明。6300円

満洲出版史

岡村敬二著 限られた諸資料から
出版法制や諸団体、各出版社の実態
などを解明した通史。8925円

吉川弘文館

〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151/価格5%税込

ここに論考を寄せている東北大学の教員はみな、いうまでもなくこの震災にあつて、研究者・教育者である前にまずはまぎれもない被災者であつた。だからこの論集では、研究者であることと被災した市民の一人であることが、いやがおうにも切り離しえず一つのこととして語られている。いいかえると、学問がその専門性に閉じこもることなく、同時代の社会とのかかわりにおいて問われている。いつてみれば、それぞれの専門デイスクリンがその臨床性において問われているのである。ここで臨床性というのは、「臨床的」(clinical)の本来の意味、病者が横たわっているその床の傍らに赴くことをもじつて、「社会の問題発生現場にどうかかわるか」というそのかかわり方をことを謂っている。ちなみに、病院を訪れる病者を迎え、診る病院医師は、語の正確な意味において臨床医とは言えない。放射能による汚染が「空気、土壌、水、食料といった未来世代の生存条件そのものを毀損する最悪の環境破壊」であるという事実が科学研究・行政と現代すべての人びと

に突きつけている問いをめぐりなまでに明快に研ぐ論考、「死亡者」ではなく「死者」とどう向きあうかを社や土葬の歴史に学ぼうとする論考、その弔いや追悼の意味をこのたびの宗教者たちの宗派を超えた説経ボランティア活動の克明な調査のなかで問う論考、御伽草子「ものくさ太郎」に「縁」という考え方の深い意味を探る論考、言葉を失うという体験から「語る」ことの意味を改めて問いなおす言語学者の論考、そして哲学では「ふるさと」の意味を執拗に問う論考から、逝く／逝かれるという厳しい体験が笑いへと反転する瞬間から説きおこし、それを自力／他力という仏教にもっとも本質的な教理問題へとつなげてゆく論考まで、いずれもがそれぞれに、みずからの被災生活、救援活動とともに、それと別のこととしてではなく、自身の研究の視点からこのたびの震災のなかで見えてきたものについて語っている。だから、人文学の論考としては破格的に迫真力に満ちる。この勁さが、今後の人文学の研究をどう変えてゆくのか、^{まぎり}毗を決して見つけたいとおもう。

■私が薦める聖学院大学出版会の本

『光の子と闇の子——デモクラシーの批判と擁護』(R・ニーバー著)

佐久間 重 (名古屋文理大学情報メディア学部教授)

ここでは聖学院大学出版会より一九九四年に出版されたR・ニーバー著武田清子訳『光の子と闇の子——デモクラシーの批判と擁護』を紹介させて頂く。原書が最初に出版されたのは一九四四年で、第二次大戦の帰趨が決定的になった頃である。そうした時代背景を念頭に置くと、本書の議論の展開は解りやすくなる。著者は、当時のキリスト教界ばかりでなく、言論や政治の分野に大きな影響を与えた米国のドイツ改革派の神学者で、一九七一年にガンによりその生涯を閉じている。外交官のG・ケナンが著者の思想に傾倒したことは特に有名であるが、J・カーター元大統領も著者の思想から大きな影響を受けていた。最近では、オバマ大統領も、上院議員時代にD・ブルックスのインタビューに答えて、著者の主張に感銘を受けたことをニューヨーク・タイムズ紙上で明らかにしている。

著者は、その多くの著作を通じて弁証的議論を展開して

いるが、本書の題名にもその特徴が見られる。この題名は、ルカによる福音書にある「この世の子らは、その時代に対しては、光の子よりも利口である」に依っている。自分の意志や自分の利益以上の律法を認めない道徳的シニックスを、聖書のよび名で「この世の子ら」または「闇の子」と名づけ、私的利益をより高い律法のもとに従わせなければならぬと信じる人々を、「光の子」と呼んでいる。当時の具体的な政治勢力で言うところ、「闇の子」はナチズムであり、これに対して「光の子」はデモクラシーの社会である。それに加え、マルキシズムはシニカルな信条ではないとして「光の子」と位置付けている。さらに遡って、中世の封建社会からの個人の解放を説き、近代デモクラシーの基礎を創った啓蒙思想家達やその後の社会思想家達も「光の子」としている。

著者は、こうした思想家達を単に「光の子」と名づける



武田清子訳
(1994年, 2243円)

だけでなく、彼らの思想に人間の悪についての洞察が欠如しているとして、「愚かな光の子」と呼んでいる。「闇の子」に対して「光の子」を位置付け、この「光の子」も「愚かな」という形容を付ける議論の展開にも著者の論法の特徴が出ている。ここで、愚かではない「光の子」がどのような人達であるかという疑問が出て来る。人間に潜む悪を喝破するだけでなく、それに絶望しない確固たる視座を持った人達が愚かではない「光の子」となるのであるが、「賢い」という形容を付けた時には、著者が人間の悪の別な側面であると指摘する人間のうぬぼれが現れてしまうことになるのであろう。

本書でも、著者は、他の著書の中でと同様にコミュニケーションの道徳性の問題にも言及している。個人は、精神の自己超越の可能性を内在し、信仰により自らの悪に対応できるが、そうした個人の集まりであるコミュニティには自己批判を可能にする制度がないので、著者は、理想主義者が説くように「世界共同体」が出来れば世界の絶対的平和が可

能になるという単純な社会観を批判する。しかし、著者は、ここで絶望するのではなく、自己批判の制度を持つ「キリスト教的」国家のデモクラシーに期待をかけるのである。本書が出版されてから半世紀以上が過ぎているが、著者の人間観や社会観は、今日の社会が抱える諸問題を考察する時に必要な多面的で現実的な視座を提示していて、今日でも色褪せることがない。翻訳者の武田清子氏は、著者から直接教えを受けた、数少ない人であり、「あとがき」ではそうした経緯や著者の思想を解りやすく解説しているのを読み応えがある。

本書を再出版した聖学院大学出版会は、良書を多く出版しているが、ニーバーの代表作である『人間の本性と運命』の後編部『人間の運命』を翻訳中で間もなく出版とのこと、完成が待たれる。なお、前編部である『人間の本性』は、武田氏による翻訳で『キリスト教人間観(1) 人間の本性』として新教出版社より一九五一年に出版されている。

ドイツ反原発運動小史

原子力産業・核エネルギー・公共性

ラートカウ 3・11後の日本の読者へ、屈指の環境史家が原子力技術の歴史家として論じる40年の歩み。海老根・森田訳 ¥2520

不平等について

経済学と統計が語る26の話

ミラノヴィッチ 不平等を計測しつづけてきた専門家が語る基礎知識。古代ローマから中国の隋代まで26話。村上彰訳 ¥3150

サイド音楽評論

[全2巻]

サイドもう一つのライフワーク。20年にわたる音楽評論活動を一望できる初の書。序文D・パレンボイム。二本麻里訳 各¥3360

ヴェールの政治学

スコット フランス共和制を揺るがす「イスラム・スカーフ禁止法」を、米国のジェンダー歴史学者が分析。李孝徳訳 ¥3675

双極性障害の時代

マニーからバイポーラーへ

ヒーリー 今日の「双極性」概念がはらむ虚構と危険を、感情病研究の歴史的蓄積をもとに暴く。江口重幸監訳 坂本響子訳 ¥4200

解離する生命

野間俊一 解離性障害、境界例、摂食障害など(傷つき体験)の諸相から何が見えてくるか。精神科医による考察12章。¥3570

落語の国の精神分析

藤山直樹 「落語は民話」の視点から人物と病理、物語の力を分析する、目から鱗の落語評論。立川談春師匠との対談付。¥2730

東京文京本郷

5丁目32-21

みすず書房

tel. 3814-0131 fax 3818-6435 (税込)

http://www.mszz.jp

■私が薦める麗澤大学出版会の本

『伊東俊太郎著作集 第11巻 対談・エッセー・著作目録』

立木教夫（麗澤大学経済学部教授）

麗澤大学出版会は様々な学問領域において豊富なりすとを有しているが、とりわけ、『伊東俊太郎著作集』全12巻は本会の名を高めた出版物の一つである。伊東俊太郎博士が、科学史、科学哲学、比較文明学の領域を大きく切り拓いてこられた日本を代表する世界的碩学であることは、周知の事実である。今回は、『著作集』の中から、第11巻を取り上げて紹介してみたい。その理由は、この巻は対談とエッセーで構成されており、読みやすく、展開にスピード感があり、しかも、『著作集』全体への良き導入ともなっているからである。

第11巻で、とりわけ興味深いことは、伊東博士の「人と学問」を知ることができることである。伊東博士は、どのような教育を受け、どのような師や本の影響を受け、またどのような関心に導かれて、理科と文科の両方の領域に跨る広大深遠な学的世界を構築してこられたのだろうか。

転機となった一連の出来事は、コイレの『ガリレオ研究』を読み、科学史研究に進む決心をされたことから始まった（38）以下、括弧内の数字は頁数を示す。次に、マーシャル・クラーク教授の『中世における力学』を読み、「出来たら自分もラテン語の古文書を解読して、こうした一次資料を分析したいと思「った」（373）こと。ここから、ウィスコンシン大学の人文科学研究所への留学が実現し、十二世紀のラテン語の数学や天文学のマニユスクリプトの解読に打ち込み、アラビアの光を浴びながらよちよち歩きを始めたばかりの西欧を発見し（38）、アラビア語も学び始め（39）、僅か二年でPh.D.を取得されたこと。そしてその七年後に、プリンストン高等研究所に客員研究員として滞在し、「博士論文でとり上げた写本（パリとオクスフォード）の外に、ベルリンとドレスデンの写本がみつかり、これらの写本もとり入れて、ラテン・テキストの改訂を行」（375）



（2010年，8190円）

なって、世界的業績を残すこととなったのである。この間、伊東博士はアラビアと西欧の関係を通して、比較文明学の構想を獲得し育てていかれたのだと思う。

十二世紀ルネッサンスで西欧が次第に力をつけていった様子と共に、その後のイスラーム科学の展開も詳しく知ることが出来る(112-118)。イスラーム科学は、なぜ西欧近代科学のようにならなかったのだろうか。この点については、井筒俊彦博士との対談で、「デカルト的知性」の有無が決定的だったと指摘されている(219)。ここには、今日、原子核と細胞核という二つの核をめぐり、危機的状況を生み出している現代科学の未来を考える上で、押さえなくてはならない重要なポイントが含まれている。

言語をめぐる議論も面白い。言語の分析を通して文化の比較にいたる研究を目指している(26)とあるが、大野晋博士との対談の中で、その意気込みがほとばしり出てくる場面がある。大野博士にタミル語の「コーマーン」と日本語の「神」がどうして結びつくのかを問う場面である。真

正面から、「そこからすぐ神にはこないと思うんです」(28)とか、「それは個人情報だから、ちよつと弱いですよ」(29)等々と鋭く突っ込みが入る。そこまで言っているのかとはらはらしながら対談を読んだ。しかし、互いに尊敬の気持ちを抱いた上での真剣勝負であるから、対談は非常にプロダクティブで、内容豊かに展開していく。

さらに、江上波夫博士と縦横無尽に語られた「世界の世界史」、伏見康治博士との対談で「欲望を根本的に断ち切らなければだめです」と明確に打ち出された倫理的信念(125-130)、小平邦彦博士に尋ねた「数覚」(195)、プリンス・トン高等研究所でゲーデル宅に招待されたときの対話(324-335)等々、興味深い話題に溢れている。一つひとつが深い思索の結晶であり、その全体がコンステレーションを成して伊東博士の「人と学問」を浮き彫りにしている。『著作集II』は、大変味わい深い一冊である。これを手がかりとして、さらに『著作集』全体に分け入っていく人は、大いなる発見と喜びを手にされることであろう。

個人加盟ユニオンの社会学

東京の管理職ユニオンと女性ユニオン東京

小谷

幸一著

(1993年)2002年

七五六〇円

家と村の社会学

細谷

昂一著

農村社会を歴史的展望のなかに位置づける大著

一三六五〇円

中国人口問題の年譜と統計

若林敬子 海松 二著

1949-2012年

八八二〇円

ひとつのアジア共同体を目指して

金泰旭 金聖哲 二編著

四六二〇円

日韓中の未来志向的な関係を築いていく試金石！
執筆 和田春樹／任娜伯／鶴嶋郁／後藤純一／伊藤谷登士翁
水本和実／西田竜也／李鍾徹／宇野昌樹／東郷和彦

御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751
http://www.ochanomizushobo.co.jp/

■ 私が薦めるケンブリッジ大学出版局の本

The languages of Japan (Masayoshi Shibatani)

ビヤーク・フレレスビッグ (Bjarke Frellesvig) オックスフォード大学東洋学部教授

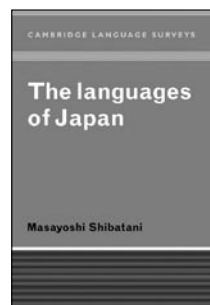
私がこの本を見つけたのは、ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院(SOAS)の書店であった。一九九〇年夏にコペンハーゲン大学の大学院生としてSOASの図書館を利用するため、ロンドンに一ヶ月間滞在した。本は出版されたばかりであったが、このような本の存在をはじめて知り、嬉しくてすぐに買った。その頃は今では想像できないほど、日本で出版された本や日本に関する本を北欧で手に入れることが困難であり、情報も本もあまり入ってこなかった。一九八〇年代の中頃、G. Wenck 氏の *Japanische Phonetik* (日本語の音声) の古本がドイツ・ウィースバーデンの Harrassowitz 出版社の書店にあると聞いて、すぐさま夜汽車に乗って買いにいったこともある。

この本のタイトル——*The languages* (複数 *of Japan*——は、文法的に数の区別がない日本語には訳しづらいが、日本語だけでなくアイヌ語も含まれることを反映したタイトル

ルである。四一頁のうち約八〇頁をアイヌ語の構造と主な特徴の紹介に費しており、ほかにはないほど詳しく、理解しやすい記述となっている。そのことだけでも、極めて貴重な本と言える。

とは言え、本書の中心は「日本語」であり、現代日本語と日本語学を綿密に紹介しているただ一つの著書である。日本語の語彙・音韻・造語法・文法のいずれについても詳しく、また方言・系統・語用論・言語史についても論じられ、日本語全体の概要を示す内容となっている。一九九〇年に購入以来、片時も離さず持ち歩き勉強や研究のために精読しているが、今では授業にもよく使う。日本語学を学ぶ大学生には最初に、また博士課程の大学院生に対しても研究を始める前には改めて、読ませている。

この本の目的の一つは、海外や日本でよく信じられている日本語についての誤った通念 (myth) を、いくつかただ



(柴谷方良著, 1990年)
Hardback: USD 111.00
Paperback: USD 63.00

UTCP叢書5
存在の
カタストロフィー
(空虚を断じて譲らない)
ために

小林康夫著

2011年の東日本を襲った大災厄を踏まえ、人間存在の問題を世界大のパースペクティブで哲学的にも状況論的にも論じ抜いた待望の論集。

◆2940円

田中浩集

第1巻

トマス・ホップズI

第2巻

トマス・ホップズII

ホップズ、シュミット、長谷川如是閑の研究を通じて、「自由・平等・平和」の思想を追ひ求め続けた氏の軌跡を集成する待望の著作集。

◆各6090円

哲学原理の転換

白紙論から
自然的アプリオリ論へ

加藤尚武著

生命の技術化・商品化がもたらす過去に例のない倫理問題について、われわれはいかにして理性的な合意を形成すべきか。いまあらためてヘーゲルの哲学体系の不可能性に対峙し、応用倫理学に課せられた使命を論ずる。 ◆2310円



未来社

〒112-0002

東京都文京区小石川3-7-2

tel03-3814-5521

http://www.miraisha.co.jp/

★出版図書目録無料進呈いたします★

※価格は税込

すことである。そのなかの主なものとして「日本語は難しく、曖昧で不合理な、ユニークな言語である」という通念がある。柴谷氏は、日本語の構造と用法の鋭い分析により、その通念が誤っていることを巧みに証明する。日本語の曖昧さや難しさを論じる時に例文としてよく挙げられるのは、「ボクハウナギダ」という文であるが、これは「ウナギ文」と名付けられ、広く知られている。ウナギ文についての論文も少なくないなか、柴谷氏もウナギ文を取り上げる。「ボクハウナギダ」は、例えばレストランでウナギを注文するときや食べるとき、魚屋でウナギを買ったときに「ボクは ウナギを 注文する／食べる／買った」と言う代わりに使われるが、これら複数の用法があるのは、この文が一つだけの意味でなく多義だからである。そのためウナギ文は曖昧で不合理な表現と考えられることもある。しかし、日本の言語学者が説明するようにウナギ文は曖昧でも不合理でもなく、ただ、レストランで料理を注文するとか質問に答えるときなど、適切なコンテキストがある場合

にしか使えない。それは、日本語が曖昧でも不合理でもなく、経済的でコンテキスト依存型の言語であることを表している。そこにはたしかに日本語の特徴の一つがある。しかしながら、日本の優秀な言語学者のなかにも、ウナギ文について二つの勘違いがありそうである。第一にウナギ文は他の言語においては珍しく、外国人の日本語習得者にとつて難しい表現であるということ。第二に「ボクハウナギダ」の英語訳が「I am an eel」であるということ。ウナギ文の「ボクハウナギダ」は「I am an eel」を意味しない。I am eel または場合によっては I am the eel を意味し、使われるコンテキストが詳しい点で少し違っても、海外でもウナギ文と同じ用法があると言っている。私は日本語の文法問題を考えたとき、再考したいときには、柴谷氏の *The languages of Japan* を手にし、それを出発点とする。読むたびに知らなかったことを発見するようなこの本に、最初の出会いから二二年たった今も飽きることがない。

■私が薦める専修大学出版局の本

『日本経済 その構造変化をとらえる』（田中隆之編著）

竹内 宏（静岡県立大学グローバル地域センター センター長）

本書は、専修大学経済学部的一般市民向け公開講座を纏めたものだ。「東日本大震災と日本経済の構造変化」の序章に始まり、1「競争と連携が育てる元気な中小企業」、2「東アジアの貿易構造の変化と日本経済」、3「現代日本農業の原点を考える」、4「変わる『日本的経営』と雇用・賃金・労使関係」、5「大きく変貌する日本の金融システム」、6「わが国の財政の何が問題なのか」という内容で、日本経済が当面している問題を総合的に取り上げている。

どの章も、平易な言葉を使い、馴染みやすい例を取り上げ、判りやすくする努力が払われている。大きな問題を小論文に纏めるのであるから、専門用語を避けたくなるものだ。それを止めるのはかなり難しい。専門用語を使う毎に解説すると、長い文章になる。専門用語なしで説明するには、昆虫学者のようにこまめに、適切な例を発見する必要がある。著者の先生方は、この難問に挑戦された。

気の毒なのは金融の分野だ。最近、金融構造が複雑になり、専門用語が激増した。それを多用せず簡潔に、かつ名論文に纏めるのは至難の業だ。財政もそうだろう。

経済学の目的の一つは、経済や産業の変化に伴って発生する、関係する人達の努力、運・不運、悲喜こともこの人生を理論的に描くことである。不幸な人生を理論的に見事に描ければ、対策が説得的になり、生きた経済学になるはずだ。現在で言えば、フリーターや失業中の若者、パートの母子家庭の生活や悩みを知り、経済的な解決方法を見いだすことだ。この点でも、この本は成功している。

日本経済は企業活動の中心が海外に移転した。日本国家の総合力が低下すると、海外の日系企業が大きな影響を受けるようになった。日中の政治対立はその好例である。

七つの論文の背景には、こうした多様な観点が、それぞれ意識されており、見事である。多くの論文は、まず歴史



(2012年, 1680円)

藤原書店

ニグロと疲れないでセックスする方法

D・ラフェリエール 音楽・文学の
星雲から叩き出す言葉の滴が、白人
と黒人の布置を転覆。待望のデ
ビュー作!! 立花英裕訳 1680円

「画家」の誕生

ルドンと文学

D・ガンボニー 戦略的に言葉を活
用したルドンをブルデューの「場」
の理論で読む。廣田治子訳 9975円

世界の中の柳田国男

R・A・モース＋赤坂憲雄＝編 柳田
は世界でどう受けとめられているか。
菅原克也＝監訳／伊藤由紀・中井真
木＝訳 祝50周年記念出版 4830円

ピーアド『ルーズベルトの責任』を読む

開米潤＝編 「日米関係の核心は、
中国問題にあり」と1920年代に看破
したピーアドとは何者か。戦後世界
を考える必読書を読む。 2940円

メドページェフ vs プーチン

ロシアの近代化は可能か

木村汎 メドページェフとプーチ
ンを切り離し、ロシアの今後の変貌
を大胆に見返した労作。 6825円

「鎖国」と資本主義

川勝平太 資本主義はなぜイギリ
スと日本に発生したのか。日本資本
主義成立の基盤としての「鎖国」の真
の意義を論じた決定版。 3780円

日中韓の戦後メディア史

李相哲編 近現代の東アジアのメ
ディアは何を経験したか、何をなす
べきか。尖閣・竹島……揺れる東
アジアのメディアを問う。 3990円

月刊機 B6変32頁 11月号 No.248
R・A・モース／Ch・
グーラット／開米潤／
川勝平太／北羽新報社
編集局報道部 篠田治美／高橋力／加
藤晴久／粕谷一希／一海知義ほか
年間購読料2000円（送料込）◎見本
誌・ブックガイド呈 ※表示価格税込
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523
振替 00160-4-17013 TEL03-5272-0301
ホームページ <http://www.fujiwara-shoten.co.jp/>

を簡単に述べ、何故、現在の経済問題が生まれたかをわ
りやすく述べている。
経済が成長して日本が豊かな国になると、教育水準が高
く、長い歴史の中で勤労モラルが形成された周辺諸国も、
日本からの技術移転に助けられて成長を開始した。間もな
く、日本の製造業は、これらの国とのコスト競争に敗れて、
工場が海外に移転した。結果、国内では失業が増え、消費
や投資が低迷して、長期のデフレ経済に落ち込んだ。企業
は海外の低賃金と戦うために非正規社員を増やしたので、
労働力の質が低下するという問題が生まれた。
その上、高齢化率が高まり、また医学が進歩した。その
敏寄せが若者にかかり、出生率を一層低下させている。企
業は海外の工場で収益を上げている。株主、役員、本社員
は賃金上がり、日本は不平等社会に変わった。こうした
高賃金国がたどる歴史的な宿命が、それぞれの専門分野で、
わかりやすく述べられている。
この本では、こうした危機的な状況の中にあっても、成

功した中小企業や農業の例を取り上げ、知恵を出せば、経
済低迷を抜け出せるという希望を与えてくれる。日本経済
が長期低迷を脱するには、ベンチャースピリットを持った
人材の育成、ベンチャー資金が集まる仕組みの確立、ベン
チャー技術を販売する市場の拡大、ベンチャー企業の経営
ノウハウの研究等が必要である。
私は幸なことに、五十五年間もエコノミストの生活を
送ってきた。それぞれの時代に、日本人は懸命に働いた。
戦前から農地解放に命をかけた人々がいた。食えなくて満
州の開拓に向かい、敗戦とともに命からがら一文無しで帰
国して、再び荒れ地を開拓した人もいた。戦後間もなく、
地方の中学生は重化学工業地域に就職し、一生同じ企業に
勤めて腕を磨き、世界一の工業を創った。そうした結果、
日本は豊かな社会になり、そして今や衰退期に入った。こ
れを立て直すには、平成の人は昭和人と同じぐらい、寝食
を忘れて考え、腕を磨き、働かなければならない。これが
読後の素直な感想である。

■私が薦める大正大学出版会の本

『関東の仏像』（副島弘道編）

多田孝文（大正大学学長）

昨今、巷では仏像がブームになっていると聞きおよんでいます。なんでも仏像を「イケメン」として鑑賞する仏像ガール、はたまた可動式の仏像フィギュアまであるとか。私どもの世代で仏像鑑賞や仏教美術といえば、まず故佐和隆研先生の『仏像―心と私たち』を思い出すのが一般的でありましょう。隔世の感を禁じ得ませんが、若い世代が仏像に興味を喚起されるのは一僧侶として嬉しく思います。

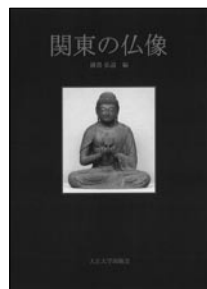
こうした仏像ブームにあやかったわけではありませんが、平成二十四年三月、本学の出版会より『関東の仏像』が上梓されました。関係諸寺院、諸機関にご協力を仰ぎ、宗派をまたいで関東一円の著名な仏像を網羅することができました。設立母体に天台宗、真言宗豊山派、真言宗智山派、浄土宗をもち、八十年以上の歴史を重ねた本学ならではの一冊であると自賛しています。

さて、本書は三十二作品を対象としますが、脇侍等を含

めれば、約六十軀の尊像を紹介しています。飛鳥時代の金銅仏から江戸時代の鑄銅仏まで、およそ千年にわたる時のなかに顕れたさまざまな技法や意匠を目の当たりにすることができます。

例えば、作品No.4「薬師如来及び両脇侍像」。これは鉦彫りのお像です。鉦彫りの仏像といえは円空仏の素朴さやユーモラスなお姿を思い描かれる方が多いでしょうが、このお像は鉦彫りでありながら端正なお顔立ちをなさっているのです。よく見ると、お顔と胸、衣の各部位で鑿の使い方を変えているのがわかります。素人ながら鑿痕の変化がもたらす視覚的効果が計算されていると感じます。

作品No.31「天海坐像」。江戸の都市計画を敷いた慈眼大師、南光坊天海大僧正の肖像彫刻です。木造彩色のお像ゆえか、まるでそこにおわすが如き迫力です。「解説」によれば現在の彩色は文化十年（一八一三）の修復時のものだ



（2012年、4200円）

そうですが、お袈裟の牡丹唐草の文様など、寄って見れば
絢爛^{けんらん}、引いて見れば重厚と視点の移動によってその趣きを
異にします。

まるで尊像を前にしたように縷々^{るる}述べましたが、これを
可能にするのが本書の特徴、百二十七点〔解説〕に載せられ
たカットも含めれば百五十点以上〕におよぶ豊富な写真です。
これらの全ては本書の刊行にあたって新たに撮りおろされ
たものと聞いています。

写真は事物であれ現象であれその瞬間を切りとったもの
だと言えましょう。ゆえに見方が限定されるかと言えなさ
にみならず。事物の来歴に想いを馳せるもよし、撮影者の意
図をあこれと推察するもよし。楽しみ方は人それぞれ、
見方は無限にあります。私も本書を眺めながら楽しんでみ
ました。

図99は、尊像のポーズを活かしたアングルをとり、これ
を見開きで見たことよって初江王^{しよこうおう}（閻魔大王の眷属^{けんしゆく}です）
の威厳をあらわすことに成功しています。逆に、アングル

を同像の左側面からとった図100では、左手のみが目につき、
妙に滑稽さを醸しだしています。

図57、図69・70はともに毘沙門天に踏みしだかれる邪鬼
像をクローズアップ。特に図57は邪鬼の腹を写しています。
これは「見えない箇所でも疎かにはしない」という仏師（運
慶だそうです）の意気込みを余すところなく伝えてくれます。
こうした写真構成からも本書がたんなる「研究書」「美
術書」でないことがわかります。

この写真について編者副島弘道は「透徹した眼と冷静な
心」「熱いまなざしと感動する心」という背反した二つが
必要だとします。そして、これらを融合させるところに仏
像の真の価値を見出しております。

私たちは自分の思いだけで仏像を見ているつもりです
が、実は仏像からの働きかけもあるのです。中世の靈験譚^{れいげんたん}
といった摩訶不思議なお話は現代にもあるのです。中世の
本書からは、偏った見方を離れる「不斷不常の中道^{ふだんふじょうちゅうどう}」、
仏教の基本的な教えを汲みとることができます。

戦後歴史学

用語辞典

木村茂光監修・歴史科学協議会編
重要テーマ300項目に概略・提起
者・概念・論争の経過や影響を詳細
に解説。図書館・研究者必携。

A5判 54600円

小堀遠江守正一

発給文書の研究

藤田恒春 著

初めて網羅される小堀正一の書状。
江戸幕府草創期の政治機構や文化人
の交流を明らかにした小堀遠州文書
の集大成。

A5判 367500円

鎌倉遺文

補遺編 東寺文書第1巻

鎌倉遺文研究会編

『鎌倉遺文』全46巻に未収録の「東
寺百合文書」を全3巻に渡って刊行
開始。中世史研究の必備史料。

A5判 157500円

歴史書

「古事記」全訳

武光誠 著

歴史家が、日本古代史の視点から訳
した「古事記」。これまでとは違う
全く新しい、そして真実の「古事記」
の世界。

四六判 39900円

東京堂出版

〒101-0051 【価格税込】
東京都千代田区神田神保町 1-17
TEL03-3233-3741 FAX03-3233-3746
<http://www.tokyodoshuppan.com/>

■私が薦める中央大学出版部の本

『現代米国税務会計史』(矢内一好著)

八ツ尾順一 (近畿大学法学部教授)

本書は、前書『米国税務会計史——確定決算主義再検討の視点から』に続くもので、前書が米国税所得税の創設期から一九五四年内国歳入法典による改正までを範囲としているのに対し、本書は、それ以後から一九八六年の税制改革法までを対象としている。

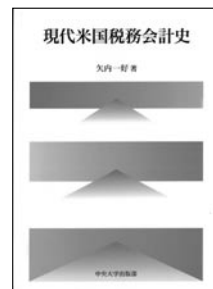
本書の特徴については「まえがき」で、次のように述べられている。

「本書の特徴といえることは、一九五四年から一九八六年までの間の米国の税制の変遷を検討し、税務会計と企業会計とが分離した場合の租税優遇措置の多用を規制するミニマム税の役割、米国税務会計における個別的な特徴といえる配当課税と日本の利益積立金に類似するE & Pの意義、マコンバー事案の最高裁判決以降の実現概念の変遷、日本にはない夫婦合算税制の生じた背景、連結納税制度に関する史的検討、非居住者課税と移転価格条項(内国歳入

法典第四八二条)に関する発生からの沿革の検討等、国内法及び国際課税の両面における米国税務会計の展開を対象にしたことである。」

このように、ミニマム税制(第5章)、E & Pの意義(第6章)、実現概念の変遷(第7章)、連結納税制(第9章)、移転価格(第11章)など興味深いテーマについて、丹念に調査・研究しているのが本書であるが、ここでは、その中の米国の夫婦合算税制(第8章)について少しコメントする。

この制度自体は、我が国にない制度であるが、アメリカにおいて、この制度が導入された理由は、女性の社会進出に伴う共稼ぎの状況に基因したものではなく、州法における私有財産制における相違(夫婦別産制・夫婦財産共有制)における税負担の不公平を是正する措置であるとしている。過去において、私有財産制度の相違によって、税負担が異なることから、夫婦別産制から夫婦財産共有制に変更する



(2012年, 3150円)

州も出現したのであるが、夫婦合算申告（内国歳入法典一〇四一条）は、これらの不公平を是正するために設けられたことが、内国歳入法典の変遷やこれに関する判例等を紹介しながら、詳細に説明している。この内国歳入法一〇四一条が創設される以前において、アメリカでは、離婚に伴う財産分与については、譲渡益（キャピタルゲイン）の課税が行われていた。しかし、内国歳入法典一〇四一条（配偶者間又は離婚に基因した財産の譲渡）では、配偶者又は前配偶者で当該譲渡が離婚に基因するものの場合、財産の譲渡による損益の認識はしないと規定したのである。我が国には、このような規定は存しない。

第8章に書かれている箇所は、日本における「離婚に伴う財産分与における譲渡所得課税」（最高裁昭五〇・五・二七判決）を考える際に、有益な参考資料となるであろう。

また、矢内教授がこのような研究を始めた動機の一つとして、忠佐市先生の「アメリカ課税所得の概念及び計算の法学論理」を読み解くことであつたと述べている。忠佐市

氏の書かれている論文の難解さは、租税法・税務会計等を研究する者にとつて、広く知れわたっている事実であるが、矢内教授が、若い頃から、その論文を、時間をかけて、コツコツと真摯に読み解いてきたことは、誠に敬服に値する。このようにして作られた本書は、矢内教授の代表作の一つであることに間違いはなく、本書が広く読まれることを希望する所以である。

組織文化と

リーダーシップ

シャイン著／梅津祐良 横山哲夫訳
リーダーが創り、組織内の前提認識となる文化。組織文化創造と変革のマネジメントのダイナミックなプロセスを明らかにする ●定価4200円

日本企業の

収益不全

平井孝志著 最適成長速度を提示！
収益性の向上を図れない日本企業。企業成長のダイナミズムからその問題に接近し、収益性向上の論理を解明、その解決に迫る ●定価3150円

企業事故の

発生メカニズム

谷口勇仁著 手続きの神話化に着目
「なぜ事故が引き起こされたのか」ではなく「なぜ当事者が安全だと考えたのか」との新視点から分析、事故防止の指針を示す ●定価2940円

「設計施工」の

効率性研究

登坂敏晴著 設計施工は効率的か！
わが国建設業界における「設計・施工一貫受注方式」に対し、経済効率性の視点から鋭いメスを当てて、建設業界の現状を解析 ●定価3150円

白桃書房

東京都千代田区外神田5-1-15
TEL03-3836-4781 FAX03-3836-9370
<http://www.hakutou.co.jp>

■私が薦める東京大学出版会の本

『聞き書 南原繁回顧録』（丸山真男・福田歓一編）

外岡秀俊（ジャーナリスト）

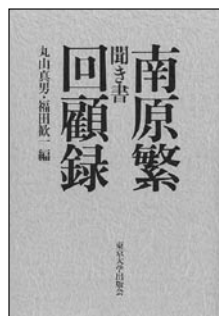
ふつう、出版社の数多い本から、「この一冊」を選び出すのは難しい。だが、東京大学出版会の場合には、そう難儀ではない。この本の語り手が、当の財団法人の設立を発意した「生みの親」であるからではない。南原繁が半生を語ることを通して、この本が、将来にわたって大学出版部が担うべき役割と覚悟を、指し示しているからだ。

大学出版部の役割と覚悟とは、「学問の自由」を守るという一点に尽きる。丸山真男、福田歓一という当代最良の聴き手に向かつて南原が専ら語るのは、政治学者としての学殖の披露でも、戦後に東大総長や貴族院議員として華々しく活躍した内幕でもない。語り手と二人の聴き手による緊迫したやりとりで詳らかになるのは、この国が戦争に突き進む際に、学問の府がいかに言論界や軍部に攻撃され「内側」から崩壊していったのか、という内実である。

京大の滝川幸辰事件や、東大の美濃部達吉による「天皇

機関説事件」など、戦争へと地ならしした言論事件は詳しく知られている。だが軍部によって大学が一方的に弾圧されたわけではない。大学内部にも時流に靡く学者がおり、軍部や政権に内通する研究者がいた。東大法学部は国家主義者から「赤化容共学風の出自本源である」と攻撃され、経済学部にもリベラル派を放逐する動きが相次いだ。

南原は戦前は学生から「洞窟の哲人」の綽名で呼ばれ、世間でも学内でも無名だった。収録された丸山の追悼文によれば、国粋派の学者は南原を「一冊の著書も公刊してゐなければ、一般思想界にはその名をすら知られてをらぬ有様である」として、その知的怠慢は「徹底自由主義思想」と関係があると論難した。だが若き日に新渡戸稲造、内村鑑三に薫陶を受けた南原は、弟子の丸山らと共に、学問の孤星を死守しようとした。彼は文学部の国体明徴講座に對抗して、法学部に丸山が担当する東洋政治思想史の講座を



（1989年，5040円）

設け、津田左右吉を講師に招いた。その最終講義で津田は右翼学生に軟禁され、丸山が体を張って救出するという「津田事件」が起きる。凄絶な思想のたたかいを経て、丸山は二度にわたって軍隊に召集され、残された南原は憂悶を抱えつつ、荒廃した大学を護り続けた。この本で政治学の二人の弟子は、南原の歌集『形相』の歌をたびたび挙げて当時の心境を尋ねるが、そうでなければ表出できない、理解できない時代だったろう。本書に収録された福田の追悼によれば、南原は「君たちは僕の書いたものの中で、何が一番長く残ると思うかね」と尋ね、微笑みながら、「それは『形相』だよ」と言ったという。

戦後に登場した南原総長は、「進歩派知識人」の代表として注目を集めた。戦時中から続く行事の紀元節には、連合国軍総司令部（GHQ）に抗して大学に日の丸を掲げ、「世界的な普遍性の基盤に立つ新しい日本の建設」を呼びかけた。続く敗戦後第一回となる天長節では、敢えて式典を行い、昭和天皇の法的・政治的責任がないことを力説する一

方で、道徳的・精神的責任を問う「退位論」を唱えた。これは、衆議院では野坂参三、貴族院では南原だけが反対したといわれる日本国憲法第九条についてもいえる。彼は政治学者として国家には最小限度の自衛力は必要と考え、そう行動した。この抵抗精神は、米国を頼り先とした吉田茂が、「全面講和論」を唱える南原を、「曲学阿世の徒」と呼ばざるをえなかったことにも通じている。

こうした南原の思想と行動は、左右の双方から攻撃され、批判を受けた。だが、嵐にも折れないリベラルな勁草のしなやかさと、信仰に由来する信念の揺るぎなさ、戦前から戦後にかけて、驚くべき一貫性を示している。

彼は戦前と戦時中、落城する「学問の府」を目の当たりにし、敗戦後はその中枢を護るべく、確固とした城壁を築こうとした。そのひとつの大きな鉄壁が、大学出版部だったのではないだろうか。

地域共創・未来共創

沖縄大学土曜教養講座500回の歩み

沖縄大学地域研究所編集 定価1785円（税込）

学問の成果をどうやって地域に還元するか

地域における教育実践活動を拡大発展させるために大学は何ができるか

大学を地域活性化の拠点とし、大学のあり方への根源的な挑戦を続けている沖縄大学の36年間の記録

多彩なテーマと講師陣で多くの市民の期待に応えてきた名物講座500回のリストと講座関係者による座談会、話題の講座の講演再録など、盛りだくさんの内容

芙蓉書房出版

113-0033 東京都文京区本郷 3-3-13
TEL 03-3813-4466
FAX 03-3813-4615
www.fuyushobo.co.jp

■私が薦める武蔵野大学出版会の本

『アメリカ仏教——仏教も変わる、アメリカも変わる』(ケネス・タナカ著)

末木文美士 (国際日本文化研究センター教授)

最近、アメリカ仏教というと、ステイヴ・ジョブスが話題になるが、彼だけ何か特別というわけではない。二十年も昔のことだが、ヴァージニア大学に滞在していた時、時々地元の坐禅会にお邪魔した。日曜日の朝、一般住宅の半地下室に十数人集まり、一時間くらい坐禅をして、少し雑談して解散するだけの会だった。山の別荘で摂心をしたり、日本人の老師の指導を受けることもあったようだが、基本は開かれた自由な会で、気持がよかった。坐禅よりもチベット仏教のほうが盛んで、その瞑想センターはいくつもあった。仏教は、やや奇異な目で見られていたかもしれないが、それでもアメリカの普通の市民の中にそれなりに根ざしているという印象だった。

タナカ氏によると、アメリカの仏教徒の数は約三〇〇万人で、全米人口の一パーセントに当たるといふ(『アメリカ仏教』、二四頁)。日本のキリスト教徒が総人口の一パーセン

トであるから、アメリカの仏教は、日本におけるキリスト教のようなものであろう。一パーセントというとなさそうだが、それだけの信者数があれば、周辺の影響力はかなり大きなものになる。実際、全米調査で、何らかの形で仏教の影響を受けたという人の数は、一二パーセントにのぼるという(同、二七頁)。

それだけの広がりを持ち、社会の中に浸透すれば、そこに変容が起るのは当然だ。仏教が日本社会に定着する中で大きく変化したのと同じである。カリフォルニア・ロールが決して邪道ではなく、立派なアメリカ発のシシであって、日本に逆輸入されているように、アメリカ仏教も独自の発展があつてしかるべきで、そこから日本の仏教が学ばなければならぬことも多いはずだ。

最近アメリカでは、アメリカ仏教の独自の発展に関する研究が盛んになっているが、残念なことに、それを的確に



(2010年, 2100円)

伝える日本語の著作は少ない。その中で、ケネス・タナカ氏の『アメリカ仏教』は、過不足なくアメリカ仏教の全貌を描き出し、読み物としておもしろいだけでなく、参考文献を網羅して、学術性をもったアメリカ仏教百科事典とも言える内実を持っている。

著者のタナカ氏は、日系二世の両親のもとに生れ、カリフォルニアで育ったが、アメリカと日本の両方で学び、教えた経験を持つ、仏教者にして仏教研究者である。今日、バイリンガルの人が多いが、日米両国の仏教界と仏教学界の内情にまで深く通じた研究者は少ない。氏の存在が重みを持つ所以である。私も東京大学大学院で氏と机を並べたが、そのユーモアに溢れ、包容力に富んだ人柄は、本書にも十二分に生かされ、冷たい研究書ではなく、温かな配慮の行き届いた本になっている。

本書は、序章「伸びるアメリカ仏教」、第一章「現状——仏教人口と種類」、第二章「浸透——一般社会」、第三章「歴史——十大出来事」、第四章「特徴——アジアの仏

教と比較して」、第五章「解釈——アメリカへの同化」、第六章「原因——全体の伸び」、結び「仏教も変わる、アメリカも変わる」という構成になっている。

今、その詳細を取り上げる余裕はないので、少しだけサワリを紹介しておきたい。著者は第一章で、アメリカ仏教の種類について従来の諸説を検討した上で、旧アジア系仏教、新アジア系仏教、瞑想中心の改宗者、題目中心の改宗者の四種類に分けている。宗派に分かれても、ほぼすべて同一の伝統の枠に収まる日本仏教の場合と異なり、アメリカ仏教は異なる伝統を持つ、まったく異質のさまざまな仏教がぶつかりあって発展してきた。そのダイナミズムから、我々も学ぶべきところは少なくないはずだ。

第四章では、そのようなアメリカ仏教の特徴を、平等化、メデイーション中心、参加仏教、超宗派性、個人化宗教の五つに纏めている。家中心の葬式仏教が崩壊しつつある日本仏教の将来を考える時、このようなアメリカ仏教の傾向は、示唆するところが大きいと思う。

ノーモア・ミナマタ訴訟 記録集

すべての水俣病被害者の救済を求めて

ノーモア・ミナマタ訴訟記録集編集委員会編

2004年10月15日の水俣病関連訴訟最高裁判決を踏まえ、水俣病問題の最終全面解決に向けてチッソ・株、国・熊本県を相手にたたかれた裁判の全記録集。



「ノーモア・ミナマタ訴訟たかひの軌跡」(ノーモア・ミナマタ訴訟関連資料)「水俣病略年表(2004年10月～2012年7月)」の3巻セット。付録データCD付。 ■11,130円

新しい東アジアの 近現代史

日中韓3国共同歴史編纂委員会(編)

国際関係の変動で読む

上巻 未来をひらく歴史

下巻 テーマで読む人と交流

未来をひらく歴史

■各2,625円

人と芸術と アンドロイド

私はなぜロボットを作るのか

石黒 浩(著) ■1,575円

効率と公平を問う

小嶋隆士(著) ■1,995円

高校数学と 大学数学の接点

これから身につけたい数学のたしなみ

佐久間一浩(著) ■2,625円

*表示価格税込



日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4

TEL: 03-3987-8621 <http://www.nippon.co.jp/>

■私が薦める明星大学出版部の本

『両親教育』（児玉九十著）

森下恭光（明星大学名誉教授）

本書『両親教育』は、昭和十一年に主婦の友社より発行されたかなり大部の同名の著書を編集し、より広く普及させることを意図して昭和五十一年一月に改めて刊行されたものである。株式会社明星大学出版部が発行するに当たり（昭和五十年七月）、「めいせい教養選書シリーズ」と銘打って、「ユニバーシティ・エクステンション」を実現しようとする草創期の一冊でもあった。

この時期に敢えて本書を推す理由は、著者が本出版部の母体である明星大学の創立者であることと、その論述内容が時代の制約を受けつつも時代を越えて存在する課題の解決に対して示唆を与えるものを持っているところ、つまり、教育の「不易流行」を説くところにある。本書の刊行に当たり、著者をよく知り、かつて文部大臣をつとめた坂田道太氏は推薦文を寄せ、「家庭教育が、おとなの考え方と子どもの考え方との微妙な結びつきのうえに築かれるもので

あり、それがいつの時代にも不変であるということ、児玉先生は半世紀以上にわたる教育実践の場から得た珠玉のことは綴られています」との賛辞を贈っている。

教育を学校教育、家庭教育、社会教育の三領域に分けて見るとき、明治五年の学制以来、学校教育を主とし、家庭教育、社会教育を従として位置づける傾向がわが国の教育の歴史において見受けられる。しかし、これら三者は本来相補的に機能するもので、その関係を主とか従として見るべきでないとする主張は著者において一貫するものである。本書のように家庭教育を論じたものも例外ではない。

ところで、著者児玉九十の略歴であるが、一八八九年に静岡に生まれ、四高を経て東京帝国大学文科大学に学んで東洋史学を専攻し、王陽明の「知行合一」は生活信条となる。卒業後は、一貫して私学教育に従事し、中村春二氏に請われて就任した成蹊学園では、その中枢として活躍。一



（1976年、品切）

九二六年に同学園を去った後は明星実務学校に移り、一九八九年に没するまで、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学を擁する総合学園を指揮した。文字通り教育に生きた一生であったと言ってよく、その間に積まれた経験と、それに根ざす信念と実践、それに方向を与える理念が一体化していたことが認められる。したがって本書は、著者の教育人生の結実の一端である。

「親も勉強」と題する章では、学校教育を「ほんとうの教育は、学校を出るときから始まるのだと考えても、差支えないのです。学校を卒業するのは、教育の終りではなくて、むしろ教育の初めなのです」と位置づけている。

「家庭教育に求めるもの」の章では、教育の本質に触れ、「教育は粘土細工ではありません。子供は粘土ではありません。わが子を、親の思い通りに、どうにでも教育できると思っていたら、それこそ大変な考え違いです。」と述べ、子を親の思い通りにできるものと考えやすいことに警告を発している。

この警告の延長線上にあるのが「わが子の観察が第一歩」と題する章で、「子供は、親の模型ではありません。標本でもありません。子供と親は全く別な人間です。」と切り切る。親は無意識のうちにわが子を自己に同一化しやすいものであり、それを防ぐために、子供をよく観察せよ、と言っているのである。

「子供を教育する資格」と題する章では、「子供を教育する人は、その理想に一步でも近づきたいと、常に努力している人でなくてはなりません。」と述べ、親であること、教師であることが子供を教育する資格のすべてではないことを指摘していた。「家庭環境の影響力」の章では、「人間は家庭に生まれて家庭に育ち、すべて家庭を根拠としての社会的活動をなすものである」とし、子供が育つ場としての家庭の影響力が占める決定的位置を強調する。

以上に紹介した通り、本書は現代の教育に対して訴えかける要素を十分に備えている。先に「不易流行」と述べた所以である。

待望のシリーズ 刊行開始

子どもと家族の 認知行動療法 [全5巻]

シリーズ編集：P.スタラード
シリーズ監訳：下山晴彦

事例と図表に基づく体系的な知識と技術で、子どもと若者が抱える複雑な問題を解決。

- | | |
|---------|-------|
| 1 うつ病 | 3570円 |
| 2 不安障害 | 3月刊 |
| 3 PTSD | 5月刊 |
| 4 摂食障害 | 7月刊 |
| 5 強迫性障害 | 9月刊 |

ワーキングメモリ

思考と行為の心理学的基盤
A.バドリー著／井関・齊藤・川崎訳 本研究の第一人者でかつ最も有名な概念モデルを提示した著者自身が応用面を含めて最新の研究成果を概説する。 6510円

精神分析技法の基礎

ラカン派臨床の実際
B.フィンク著／椿田貴史他訳
ラカン派として著名な著者が他派の精神分析理論と対比させながら、どのような技法で何をするのが精神分析なのかを明確にした好著。 5250円

臨床心理士に なるために [平成24年版]

(財)日本臨床心理士資格認定協会監修
臨床心理士資格取得の総合ガイド。平成23年度試験問題(抜粋)に正答と解説を加え、どのような専門性が求められているかを示す。 1260円

誠信書房
SEISHIN SHOBÔ

東京都文京区大塚3-20-6
http://www.seishinshobo.co.jp
03-3946-5666 [価格は税込み]

■ 私が薦める東海大学出版会の本

『ダーウィンフィッシュ——ダーウィンの魚たちA-Z』（ダニエル・ポリー著）

武藤文人（東海大学海洋学部准教授）

本稿で紹介する近刊の『ダーウィンフィッシュ』は、ダーウィンと魚類のあらゆる関わり合いについて総覧した、辞書形式の奇書である。奇書はしばしば貴書に通じるが、本書はその好例と言える。

著者のポリー氏は発表論文等の業績数は主要なもので五〇〇を超え、その意味では世界でもっとも生産的な海洋科学者である。研究対象は水産資源学、生理学、形態学、生態学の広範な範囲に及ぶため、それらの著者のD. Paulyが同一人物と気がついていない人も多い（かつての私もそうだった）。読者は本書で彼の新たな側面を知るだろう。ポリー氏の最近の主な研究テーマは、漁業と地球温暖化による海洋生態系と水産食資源へのインパクトなどで、著名な業績には水生生物の生息数のベースライン変化や、漁獲対象を下位の小型魚種に変更せざるを得なくなるフィッシングダウンがある。論文業績のほか、世界の魚類のデータベ

ースのFishBaseや、海洋生態系のコンピュータ解析ソフトであるEcopath・Ecosimの提唱者にして共同開発者の一人である。ポリー氏に反論のある人々でも、それらの恩恵は十分に被っているはずだ。また、Sea Around Us Projectの責任者でもある。ポリー氏の研究グループの仮説はしばしば大胆である。その仮説提唱の過程はいわゆるフェルミ推定の範疇に入るだろう。フェルミがシカゴ市の人口から市内のピアノ調律師の数を推定したように、ポリー氏らは少ない情報を手掛かりに海洋の状態を推定あるいは予見する。そして、世界中で賛否の大議論がまきおこり、結果として水産学を含む海洋科学の進歩に大いに役立っている。学問の跳躍的進歩の鍵となる人物である。

ポリー氏いわく、彼の履歴は「ちよっと変わっている」。一九四六年、アフリカ系の駐仏米軍兵士を父に彼はフランスのパリで出生した。父と生き別れた後、母親の元から一



（西田 睦・武藤文人訳）
（2012年、6510円）

種の幼児略取に合い、スイスで奴隸的拘束の下に成長した。一六、七歳で拘束先からドイツに逃亡し、自力で中学・高校に進んだ。さらに身障者の援助関連の仕事を行った後に奨学金を得て、ドイツのキール大学に入学をはたす。そして水産学を専攻、人々を助ける応用科学を志した。一九七九年には海洋学の博士号を取得し、キール大学漁業生物学研究所助手、フィリピンにある国際水産資源管理研究センター (ICLARM) の研究員から所長を経て、現在はカナダのプリティッシュ・コロンビア大学に在る。学会屈指の不撓不屈の人である。通常、彼のような筋金入りの人物は実業界、法曹界、あるいは医師への道を歩むイメージがある。そうならなかったのは我々同学のものにとっては幸運な異例であるが、どの道に進んでも大成しただろう。

本書にはダーウィンの捕った魚（さらには現存するその標本）、ダーウィンに献名された魚、ダーウィンが著作・日記・書簡などで言及した魚が掲載され、さらにはそれらに関連する諸事項・人物などが示されている。そもそも原著

名の Darwin's Fishes が Darwin's Finches からの音韻連想、いわゆるダジャレ・おやじギャグでもあるように、書きぶりはきわめて自由闊達で、楽しめる読み物である。しかし、著者の知識と見識に並々ならぬものがあるため、一見、猥雑とも見える箇所にも、しばしば隠された深い意味がある。それらをどう解釈するか、また、どう日本語に置き換えるかで翻訳関係者一同で頭をひねらされた。著者のダニエル・ポーリー氏は本書の執筆に一〇年の歳月をかけている。その間、彼は余暇と休日はなかったとのことである。西田睦先生を筆頭とした我々の翻訳作業も、七年の歳月をかけてしまった。七年前の自分を思いつつ、その責任の一端を痛切に感じている。

当方は本書訳出にかかわって、魚類、ダーウィン、ポーリー氏、海について大いに見識を深めることができた。いくつかの研究着想については、何らかの形で解決したい。本書は重層的な読み方ができる好著である。読者諸氏には、強く推薦したい。

《流求国》と《南島》

古代の日本史と沖縄史

来間泰男 著

シリーズ 沖縄史を読み解く 2
四六判並製 439頁 定価 3,990円



『隋書』流求国は沖縄のことか。古代大和王権は「南島」を支配したが、そこに沖縄は含まれているのか。日本の平安時代まで沖縄はまだ縄文時代。両者の対照性を際立たせながら、10世紀までの沖縄史を描く。

日本経済評論社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-2
TEL. 03 (3230) 1661 FAX. 03 (3265) 2993
<http://nikkeihyo.co.jp> (価格は税込)

■ 私が薦める三重大学出版会の本

『凉山彝族の言語と文字』（福田和展著）

荒井茂夫（三重大学人文学部教授）

本書は中国雲南省凉山彝族自治州^{りやうざんいぞうとく}に居住する彝族言語文化と歴史、及び中国言語政策と彝族の言語生活との関連について長年の研究をまとめたもので、さらに具体的に彝語を学べるように「彝語会話六百句」（李明・馬明著）の翻訳を付ける。この分野の彝族及び彝語研究者ばかりか、少数民族言語に興味を抱く初学者や中国の言語政策に興味を持つ人々にとって好書である。構成は、Ⅰ「彝族の伝統社会」、Ⅱ「彝族の言語」、Ⅲ「彝族に伝わる伝統文字」、Ⅳ「清末から中華民国の民族言語政策と彝族」、Ⅴ「中華人民共和国の言語政策と文字改革」、付録からなっている。

彝族は雲南省（四七二万）、四川省（二二二万）、貴州省（八四万）、広西チワン族自治区（九七二二）に広く分布する総人口七七六万二二六六人、中国を構成する五六民族の中では八番目の規模を持つ（二〇〇〇年統計）が、国境を越えてベトナム、ミャンマー、ラオスにまで広がっている。彝族

という呼称は中華人民共和国成立以降に統一されたもので、自称としては「ノス」（Nusu）、「ラス」（Lapsu）、「ニス」（niesu）、「ノスボ」（Nusupo）など居住地域によって異なっていた。呼称の違いの背景は地理風土と関わる。言語的にはシナチベット語族のチベット・ビルマ語派さらに下部のロロ・ビルマ語支に分類され、六大方言に分かれるが、音声や語彙に隔たりがあつて相互の通話は困難である。とりわけ四川省大凉山や雲南省小凉山などは四〇〇〇メートル級の高山地帯で特に方言の孤立化が著しいが、比較的平地の彝族は古くから漢族や他の少数民族との交渉が活発で雑居も行われていたので、漢語が生活においても必要であつた。

そうした彝族の歴史性について、Ⅰ章では伝統社会の奴隷まで含む階級構成について言及し、一九五六年の「民主改革」まで継続したのだが、今でも凉山の奥地では同じ階



（2011年、2100円）

台湾文学と 文学キャンプ

読者と作家の
インタラクティブな
創造空間

赤松美和子著
税込 3360 円

蒋介石研究

政治・戦争・日本

山田辰雄・松重充浩
川島真編著

予価 4750 円
〔2月刊行予定〕

五胡十六国

中国史上の民族大移動

〔新訂版〕

三崎良章著
税込 2100 円

中国 社会経済史 用語解

斯波義信編
税込 14700 円

中国出版文化の総合情報誌

月刊 東方

年間購読料 税込1000円
〔見本誌無料贈呈〕

東方書店

東京都千代田区神田神保町 1-3
tel.03-3937-0300 fax.03-3937-0955
<http://www.toho-shoten.co.jp/>

級内で結婚するなど階級意識が生きていることを指摘している。またそうした社会構造は伝統的血縁関係に支えられているし、さらに伝統的血縁関係はまた伝統的宗教信仰（祖先信仰）と密接に結びついているために、伝統システムを破壊する「民主改革」は無抵抗で行われたのではなく、流血の抵抗もしばしば発生したことを指摘している。

Ⅱ章では彝語の特徴と彝語の六大方言とその下部方言構造について詳述し、前述の民族の自称の違いと地域について突き合わせ彝語の言語地図の理解をしめしている。

Ⅲ章では言語地図の世界をもとにして伝統文字の起源に関する唐代起源説、漢代起源説、仰韶文化起源説、龍山文化起源説、古羌起源説などを絵図を示して解説する。更に表音文字説と標語文字説の論争と音義結合説に至るまでを具体的な絵図を使って分かりやすく説明し、漢化が進む今日における伝承の問題に言及している。

Ⅳ章とⅤ章は中華民国や中華人民共和国の民族政策による彝族の伝統と言語に対する変化について客観的に分析し

ている。ポラード文字を応用してオーストラリア人宣教師による彝語の共通表記方法が一九〇四年に進められ、初めて彝語世界の表記統一が試みられるようになった。そして中華民国の時代を経て中国共産党政府の少数民族ローマ字化方案（一九五五）による強制的文字化などの問題を指摘し、結局今日までの少数民族の言語と文化の保護政策とは漢化即ち同化の促進ということに他ならず、漢語教育によらなければ社会的上昇が限られまた困難であるという圧力が、必然的に伝統的言語文化世界を圧縮して、若い世代の離脱を進めてしまっているという大きな問題に言及している。

「彝語会話六百句」は付録となっているが、生きた彝語に触れ学ばうと思う者にとっては貴重な教材である。日本ではこうした教材はないし、初めて翻訳されたことは特記すべきことである。

■私が薦める大阪大学出版会の本

『緒方洪庵全集 第二巻 扶氏経験遺訓 上／第二巻 扶氏経験遺訓 下』
(適塾記念会緒方洪庵全集編集委員会編)

村田路人 (大阪大学大学院文学研究科教授)

一九六六年だったか六七年だったか、記憶がはっきりしないが、『朝日新聞』で「近畿百年」というタイトルの連載ものがあつた。いわゆる「明治百年」で、幕末維新がブームになっていた頃である。幕末維新好きの少年であつた私は、毎回わくわくしながらその記事を読んだ。この連載の一つが緒方洪庵の適塾をテーマにしたものだった。塾生たちによる刀傷のあとが生々しい柱が、裸電球に照らされた塾生大部屋に立っているさまを写した写真は、今も脳裏に焼き付いている。そのとき、適塾が大阪北浜に現存していることを初めて知り、是非適塾を訪れたいと思った。

数年後、私は大阪大学文学部に入学した。文学部の学生といえども、教養部ではいくつか自然科学系の科目を履修する必要がある。私は迷わず「化学」を受講することにした。というのは、最初の講義の時間に教授が、「自分は幼い頃から歴史学が好きで、化学の道に進むか、歴史学の道

に進むか迷ったが、結局化学を選んだ」「この授業の最終回到適塾を見学する」といわれたからである。長年の念願が叶い、私は授業の最終回到適塾を見学することができたのだが、この教授こそ、本書の刊行に文字通り命を捧げられた芝哲夫先生であつた。芝先生は、阪大理学部で教授で、教養部の「化学」の授業も担当されていたのである。のちに知ったことだが、洪庵・適塾の研究者でもある先生は、当時、老朽化が進んでいた適塾の保存に奔走されていた。

本書に収録された『扶氏経験遺訓』(安政四年(一八五七)刊)は、緒方洪庵がドイツのベルリン大学教授フーフェランド(C. W. Hufeland 一七六一―一八三六)の著書 *Enchiridion medicum* (『医学必携』、一八三三年刊)の第二版(一八三八年刊)のオランダ語版を訳したものである。このオランダ語版は、オランダのハーゲマン(H. H. Hageman, Jr.)による翻訳で、一八三八年に出版された。『扶氏経験遺訓』は、本編二五巻、



(2010年, 10500円)

附録三卷、薬方編二卷より成る大著で、本編は、各種の病氣について、それぞれ「徴候」「原由」「治法」の順に解説を施したものである。『医学必携』は、臨床医としての著者の五〇年にわたる医学実践の経験をつまえたもので、当時の西洋医学に多大の影響を与えた。オランダ語版は、刊行後間もなく日本にもたらされ、早速何人かの蘭学者によって翻訳が試みられた。洪庵もその一人で、天保一三年（一八四二）頃には大半の翻訳を終えていたようである。西洋の最新医学を直ちに日本に取り入れようとした当時の蘭学者たちの気概には驚かされる。

『扶氏経験遺訓』の「凡例」を読むと、一切の憶測を排し、あくまでも臨床実験の結果に基づいて叙述するフーフエランドの科学的な態度に洪庵が深く共感し、翻訳を決意したことがわかる。また、洪庵は「凡例」で、「熟読数回ニシテ漸ク味ヒヲ生シ、玩味スレハ愈意味ノ深長ヲ覚エ、自ら旧来ノ疑団氷釈セルヲ知ラス、殆ト寝食ヲ忘レタリ」とも述べている。真の名著とは、古今東西を問わず、このよう

な書物を指すのであろう。日本を代表する蘭学者が西洋を代表する医学者の畢生の大作に出会った結果、生み出されたのが『扶氏経験遺訓』である。

洪庵が、意味のとりづらい逐語訳よりも、文意を正確におさえたわかりやすい意識を心がけていたこと、その翻訳姿勢に福沢諭吉が大きな影響を受けたことは、よく知られている。『扶氏経験遺訓』の文章は、まさにそれを実践したものであり、蘭書翻訳の歴史という観点からも、同書ははなはだ重要な価値を有している。

本書の校訂者である芝先生は、『扶氏経験遺訓』の翻刻と注釈に、病身をおして全身全霊で打ち込まれた。『扶氏経験遺訓』と洪庵をこよなく敬愛する先生の出会いは、『医学必携』と洪庵の出会いにも比すべきもので、本書には、洪庵が『医学必携』の翻訳にかけた情熱に通ずるものが窺える。

先生は、本書の校正を終えたあと、あの世に旅立たれた。本書が刊行されたのは、その二ヵ月後のことである。

あるくみるきく双書 全二五巻

宮本常一とあるいた昭和の日本

監修・田村善次郎・宮本千晴 ● 揃定価七三五〇〇円 ● 各巻定価二九四〇円
農山漁村から都市の路地裏まで限なく歩き、むら・まちの魅力を
見出し、地域を興す昭和旅行紀行。歩く民俗学者といわれた宮本常一
と若き弟子達が昭和四二〜六三年に編集した伝説の紀行雑誌「あ
るくみるきく」を、写真多載し地方別・テーマ別に再編集。

〈地方別巻〉全18巻

1 奄美沖縄、2 九州①、3 九州②、4 中国四国①、5 中国四国②、6 中国四国③、7 近畿①、8 近畿②、9 東海北陸①、10 東海北陸②、11 関東甲信越①、12 関東甲信越②、13 関東甲信越③、14 東北①、15 東北②、16 東北③、17 北海道①、18 北海道②（アイヌ）

〈テーマ別巻〉全7巻

19 焼き物と竹細工、20 祭と芸能、21 織物と染物、22 けもの風土記、23 漆・柿渋と木工、24 祈りの旅、25 青春彷徨

三澤勝衛著作集

風土の発見と創造 全4巻

● 揃定価二九四〇〇円

地域に秘められた力＝「風土」の発見と、それを生かした産業暮らし・教育創造の筋道を示す

農文協

〒107-8668 東京都港区赤坂7-6-1
T03-3585-1142 F03-3585-3668

■私が薦める関西大学出版部の本

『わかりやすい刑罰のはなし——死刑・懲役・罰金』（永田憲史著）

松尾誠紀（関西学院大学法学部准教授）

「死刑、懲役、禁錮、罰金、拘留及び科料を主刑とし、没収を付加刑とする」。わが国の刑法九条はこのような規定により刑罰の種類を明示する。刑罰はこれらに限られるのであって、それ以外の制裁（例えば、本書でも紹介される「交通反則金」）は刑罰ではない。いかなる行為に対し、どの種類、どの範囲の刑罰を科しうるかは法律で規定されている（罪刑法定主義）。そうした法律の代表的なものは「刑法」という名の法律であるが、犯罪と刑罰はそれだけに限らず、道路交通法をはじめとして様々な法律に規定されている。

近時、こうした刑罰について社会の関心が高まっている。その背景として、犯罪被害者保護の意識の高まりから行為者の刑の重さに関心が向けられたこと、裁判員制度の開始によって一般市民にも刑罰の言渡しに直接関わる可能性が生じたことなどが考えられる。もっとも、新聞等の報道において刑罰が扱われていても、そこでは言い渡された刑が

どの程度であったかにとどまるものであって、それがその後どのように執行されるのかを知る機会は少ない。そうした状況の中、本書は、刑罰制度の専門家である永田憲史・関西大学法学部准教授が、一般の読者に向けて分かりやすく刑罰の制度・運用について解説をした名著である。著者は、すでに『死刑選択基準の研究』（関西大学出版部、二〇一〇年）を出版されている他、極めて多数の研究論文を発表されている気鋭の若手研究者である。

本書は以下の四章から成るが、各章においてはトピックごとに説明がなされているので、分かりやすく読みやすい。第一章「刑罰を言い渡す手続きのはなし」では、刑罰が科されるまでの刑事手続を概観する。しかし、それは単に制度を説明するだけの無味乾燥なものではなく、「任意同行」や「保釈」といった普段の報道でよく耳にする言葉の解説や、裁判員制度に関する詳しい説明、さらに裁判傍聴に訪



（2012年，1575円）



有斐閣 新刊案内
（価格に税別）
東京・神田・神保町2/Tel03-3265-6811

<http://www.yuhikaku.co.jp/>

終戦戦後日記 —1945～50年

大正一法学者の晩年

穂積重遠著 A5判

大村敦志校訂 8400円

第一部東宮奉仕目録

第二部最高法官日記

貴重な戦後史の資料。

沖縄返還と 日米安保体制

中島琢磨著 A5判

5040円

佐藤榮作政権が沖縄
の施政権返還を実現
する過程を描く。

財政赤字の 淵源

寛容な社会の条件を考える

井手英策著 四六判

2835円

日本の財政赤字の原因
と構造を明らかに
する。

リレーションシップ・ マーケティング

コミットメント・アプローチ
による把握

久保田進彦著 A5判

4200円

中核的な概念や基盤
的理論を検討し全体
像を体系的に捉える。

北・東北アジア 地域交流史

姫田光義編

〔有斐閣アルマ〕 2100円

ユーラシア大陸の東
端・日本海から中央
アジアまでの歴史。

◎図書目録送呈◎

れる際に役立つ情報なども盛り込まれており、一般の読者にとって親しみやすい内容である。

第二章「死刑のはなし」では、死刑に関し解説する。本書では特に、死刑選択の基準（どのような場合に死刑が言い渡されるのか）に関し、それを専門的に研究された著者の立場から非常に詳しくかつ分かりやすく解説がなされる（死刑を言い渡す基準として「被害者・五人分の悪質さ」（同七八頁）と指摘するが、その内実は本書を参照されたい）。一般には死刑制度の是非がよく論じられるが、裁判員制度が導入された現状では、こうした死刑選択基準にこそ関心が向けられていると思われる。さらに、少年事件と死刑に関連して、一八歳の少年が母子二人を殺害した光市事件をめぐる一連の判決についても詳しく解説する。

第三章「懲役のはなし」では、懲役、禁錮の刑に関し解説する。刑務所内でのテレビ事情は、入浴は、医療事情は、といった普段は見聞きできない刑務所の中の実態が紹介される他、近時創設された、民間企業と共同で運営されるP

F1刑務所に関する解説、受刑者の更生改善に向けた取り組みも紹介されている。裁判員裁判で最も言い渡されることが多い懲役刑であるから読者の関心も高いと思われる。

第四章「罰金のはなし」では、罰金刑に関し解説する。交通反則金と罰金の違い、罰金を完納できない場合に用いられる労務場留置は、読者にとって身近な話題である。さらに、罰金に関し、わが国とは異なり、欧州の一部の国で採用されている日数罰金制（罰金の日数を決め、一日毎の金額を対象者の経済状態を考慮して決定する制度）を紹介することで、罰金刑の公平な適用とは何かについて問題を提起する。

本書は、各刑罰の制度・運用について分かりやすく解説したものであるが、折に触れて著者ならではの鋭い意見も率直に述べられている。知るだけでなく、考える機会も得られる。裁判員に選ばれた人は、有罪判決を受けた被告人がその後どのように処遇されるのかに非常に関心があると聞く。その意味において本書は今まさに求められている一冊である。

■私が薦める九州大学出版会の本

『バンジャマン・コンスタン日記』

太田一昭（九州大学言語文化研究院教授）

コンスタン（一七六七～一八三〇年）は、スイス生れのフランスの政治家・思想家・作家。一般には小説『アドルフ』の作者として名高い。現存の「日記」の記載は、一八〇三年一月～同年四月、一八〇四年一月～一八〇七年十二月、一八一一年五月～一八一六年九月の三期計九年半に及ぶ。文人政治家の思索と論考執筆の苦闘、同時代の貴顕、政治家、知己の人物評を記す。「日記」は、フランス革命後の激動期を映し出す一級の史料である。それはまた、『アドルフ』誕生の舞台裏を覗かせる作家の自己省察の記録でもある。

一八〇三年の「日記」は、コンスタン自身の結婚の省察録である。宿命の愛人スタール夫人の「魔力」から脱すべく「才ある女ではない」アメリカ・ファブリとの結婚を考えるも踏ん切りがつかず、遅延逡巡のあぐく問題を先送りするまでを詳述する。翌年一月再開の「日記」にはまず、

文人・知識人との交友録、読書録、宗教史執筆録が見える。古代ギリシアの将軍・政治家・悲劇詩人ソフォクレスについて「位は忘却の彼方、死して文才を残す」と記しているのは、コンスタン自身の将来を予言するかのようで興味深い。日記再開後しばらく、身辺状況を綴る筆致はまだ穏やかだ。しかしやがて、スタール夫人と繰り広げる愛憎劇の記述が目立ち始める。コンスタンは夫人の呪縛を断ち切ることでできず、逡巡煩悶を「日記」に記す。

一八〇五年、深く敬愛するタルマ夫人が他界。コンスタンは心が頹れ、日記を綴る気力もほとんど失せてしまう。かろうじて数字の符牒を使った「略日記」を綴る。「略日記」は仔細を省く。しかし暗号の使用は、きわどい性談を可能にする。「F」の記号を用いて妻との交媾を記録した作曲家のように、コンスタンは数字の①を用いて愛人との関事を記す。かくて「略日記」はしばしば、ウィタ・セクスア



高藤冬武訳
(2011年, 9870円)

知泉書館

原子力時代の驕り 「後は野となれ山となれ」で マルチダウン

R. シュペーマン / 山脇直司・
辻麻衣子訳 長年にわたる反
原子力の倫理学的基礎づけを
提示 四六 / 136p / 2200 円

希望の倫理

自律とつながりを求めて
岡野治子・奥田暁子編 福
祉, 歴史, 社会, 文学, 倫理
などの問題意識から未来を
構築 A5 / 304p / 3500 円

小さなよろこび 大きな幸せ チュービンゲン便り

横井秀治著 ドイツの生活や
地域, 福祉, 社会を描き出す
ハウスマン(主夫)のまなざ
し 四六 / 380p / 2800 円

魂について

治癒の書 自然学第六篇
イブン・シーナー / 木下雄介
訳 中世ヨーロッパのアリス
トテレス導入に多大な影響を
与えた原典からの翻訳・註解
A5 / 386p / 6500 円

パスカルの宗教哲学 『パンセ』における 合理的信仰の分析

道林滋穂子著 科学者パスカ
ルの精神の軌跡を多面的に明
らかにし回心後の内面に迫る
A5 / 304p / 5000 円

西洋中世研究 第4号

西洋中世学会編 特集・天使
たちの中世。歴史, 思想, 文学,
絵画, 音楽などの最新論文を
紹介 B5 / 256p / 3500 円

東京都文京区本郷 1-13-2 (税抜)
TEL03-3814-6161 FAX03-3814-6166
http://chisen.co.jp

リス(性生活)日記の様相を呈する。コンスタンにとって、性は両義的だ。「愛する女を相手にして営む快楽、愛しくも懐しきかなー」と心満つるかと思えば、①は「余が人生の悶乱苛立の一大原因」と嘆く。「略日記」は、性愛のダブルバインドに囚われたコンスタンの懊悩をあますところなく伝える。

一八〇六年十月末の記載に、「小説^{ロマーン}」の筆を執る」と見える。コンスタンはその頃シャルロット(デュ・テルトル夫人)と愛人関係を結び、スタール夫人の軛から離脱しようと煩悶していた。「小説」は後年、性愛の高揚と倦怠と修羅を描く『アドルフ』として結晶する。コンスタンは、転んだただでは起きない、したたかな小説家だ。

一八一一年五月から再開される最後の「日記」は、他見を恐れてかあるいは詳述する余裕がなかったか、「略日記」以上に略記が目につく。例えば宗教史論執筆についてはただ「仕事」と記し、特段の仕事をしなければ「無為」と省筆し、政治情勢についても略述にとどめることが多い。「交

接絶えてなきに等し」い妻(シャルロット)に不満の記述も散見されるが、筆致は醒めている。一八一四年八月末、旧知のレカミエ夫人に対して突然激しい愛情を燃やす。恋するコンスタンは饒舌である。恋の戦闘継続中の一八一五年、復位したナポレオンに謁見の記述が見える。コンスタンが激動の時代に身をもって生きた政治家であったことを実感させられる瞬間だ。

訳文は擬古文。明晰にして流麗。フランス語の鋭い読解力と稀有な日本語の筆力とを併せ持たねば到底なし能わざる達成。「年譜」は詳細にして緻密、「解説」の評伝は秀逸である。コンスタンの生い立ちと教育から書き起こし、複数の女性の間を揺蕩いつつ激動の時代を自由主義者として生きた文人政治家の姿を鮮やかに描出する。この大巻(A5判七七〇頁)の上梓に二〇年を要したという。本書の完成度の高さが、投入された知的エネルギーの大きさを裏づける。世にある凡百の訳書のなかで文学書と呼べるものは少ない。本書は訳業の金字塔であって、紛れもない文学作品だ。

初版本、ナンセンスなフェティシズム

福澤諭吉著

『改暦辨』

酒井道夫（二代目酒井九求堂）



右：官許印の押された表紙。縦 22 × 横 14.8cm。左上：本文は総ルビ。ここでは、地球と月の運行をそれぞれ図示しながらわかりやすく解説。左下：最後は時計の見方について。小冊子ながら、さすがに行き届いた内容

特集の内容にふさわしいネタをあげよ、と編集子からの厳命を受けて悩んでいたら、拙架でこれ（慶應義塾一八七三）を発見した。昔、先輩のS教授がさりげなく手渡しして下さったものが、以来そのままここで長らく眠っていた。元祖大学出版部が創設された頃の出版物だ。和紙二つ折りの折丁を一二丁。二箇所を紙コヨリで綴じただけの簡易製本。究極の小冊子である。

恐る恐るページをくつて一驚した。旧暦の閏月にふれて「一年と定めたる奉公人の給金は十二箇月の間にも十兩十三箇月の間にも十兩なれば一箇月はただ奉公するかただ給金を払ふか何れにも一方の損なり」。平明でツボを心得た語り口は素晴らしい。たちまちにして十萬部ほどを売り捌いたという。

表紙右上に「壬申十一月官許」のハンコが押されている。明治の改暦は、明治五年壬申十二月三日を期して行われた。この日が次年の明治六年一月一日（本冊子の発行日でもある）になったのだ。改暦の詔が降ったのが一月九日だそうだから、その日から発行日まで二〇日余りしか経ていないではないか！ 当時どんな役所がどんな手続きを経て「官許」を下したのか知らないが、この電光石火ぶりはどうなんだ。福澤先生の実力には計り知れないものがあつたに違いない。詔に先立つて、実質「官許」が下された？ まさか。

当時、福澤諭吉は改暦に当たつての拙速な施行を知つて、この原稿を一夜漬けて脱稿したと伝えるが、執筆は一晚でやつけたとして、三つの図版を含む一二版の整版、印刷、製本をこの期間で完遂する能力を、発足したばかりの慶應義塾出版局はもっていたわけだ。前身の「福澤屋諭吉」は当代きつてのバストセラー発行元だったからこの程度のことは平気だったのか。

「十二月の三日が正月の元日になるとばかりいふて夢中にこれを聞き夢中にこれを伝へなば実に驚くべきことなれども平生より人の読むべき書物を読み物事の道理を弁じてよくそのもとを尋れば少しも不思議なることにあらず」「この改暦を怪む人は必ず無学文盲の馬鹿者なり」。わっ！

一般社団法人 大学出版部協会賛助会員社名簿

[50音順] 2012年12月1日現在

株式会社朝日新聞社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
垂細垂印刷株式会社	〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154
株式会社アベル社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408
尼崎印刷株式会社	〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20
王子製紙株式会社	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5
岡本出版発送株式会社	〒353-0001 埼玉県志木市上宗岡3-16-2
カクタス・コミュニケーションズ株式会社	〒100-0005 東京都千代田区丸の内3-2-3 富士ビル7F
城島印刷株式会社	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6
株式会社京都学術振興会	〒605-0009 京都府京都市東山区大橋町88-1 辻野ビル2F-A
株式会社クイックス	〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-13 ニュー原鉄ビル5F
株式会社桑川印刷	〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7
港北出版印刷株式会社	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7
三松堂印刷株式会社	〒101-0065 東京都千代田区西神田3-2-1 佐友不動産千代田ファーストビル南館14階
三美印刷株式会社	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8
三立工芸株式会社	〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F
三和印刷株式会社	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井薬師堂1822-1
信濃印刷株式会社	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11
新日本印刷株式会社	〒162-0801 東京都新宿区山吹町342
大同印刷株式会社	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20
ダイニツク株式会社	〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 御成門ビル
株式会社太洋社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1
株式会社竹尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6
宗教法人天然寺	〒204-0021 東京都清瀬市元町1-4-5-711
株式会社東京弘報社	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
株式会社とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座8-11-11
東光整版印刷株式会社	〒135-0006 東京都江東区常盤2-12-15
株式会社トーヨー企画	〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7
株式会社日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7
萩原印刷株式会社	〒112-0004 東京都文京区後楽2-21-12
株式会社博報堂	〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー 19F
株式会社平文社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7
ベル製本株式会社	〒350-1155 埼玉県川越市下赤坂752-1
株式会社堀内印刷所	〒335-0034 埼玉県戸田市笹目3-11-5
株式会社毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
株式会社遊文舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31
株式会社読売新聞東京本社	〒104-8243 東京都中央区銀座6-17-1
株式会社ライトコミュニケーション	〒101-0042 東京都千代田区神田東松下町28-5 吉元ビル4F
渡辺印刷株式会社	〒152-0031 東京都目黒区中根2-7-1

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同下さり、ご支援頂いている各社様をご紹介させていただきます。なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。

●広告掲載出版社一覧 (掲載順)

岩波書店	千代田区一ツ橋2-5-5	芙蓉書房出版	文京区本郷3-3-13
吉川弘文館	文京区本郷7-2-8	日本評論社	豊島区南大塚3-12-4
みすず書房	文京区本郷5-32-21	誠信書房	文京区大塚3-20-6
御茶の水書房	文京区本郷5-30-20	日本経済評論社	千代田区神田神保町3-2
未来社	文京区小石川3-7-2	東方書店	千代田区神田神保町1-3
藤原書店	新宿区早稲田鶴巻町523	農文協	港区赤坂7-6-1
東京堂出版	千代田区神田神保町1-17	有斐閣	千代田区神田神保町2-17
白桃書房	千代田区外神田5-1-15	知泉書館	文京区本郷1-13-2



英文校閲



和英翻訳



組版・印刷

英文学術書の執筆・出版 サポートはお任せ下さい！

カクタスのここが強み

アカデミックに特化した豊富な経験と実績

カクタスは、これまで全世界で2万人以上の研究者、日本においては600以上の大学様に英文校正を中心とする執筆サポートを提供してきた実績があります。

翻訳～校正～組版～印刷まで、英文出版のためのトータルサポート

原稿を頂いてから印刷物（書籍、パンフレット等）制作までの全工程をサポート。複数業者との煩雑な調整がなく、制作期間中も日々の業務に最大限注力することができます。

専門分野の英語エキスパートによる作業チーム

国際的なアカデミック舞台上で通用する出版物の作成には、各分野の知識を持つ英語のプロによる英文校正・英文組版が不可欠です。複数の研究領域に特化した校閲・翻訳スタッフが多数在籍しています。

制作物一例

- 印刷物
書籍、報告書、論文集、
紀要、ジャーナル、パンフ
レット、チラシ、記念誌
- 電子メディア
電子ジャーナル、
ウェブサイト

実例



京都大学学術出版会様

日本物理学会様

CACTUS

日本の「国際化」を応援します

カクタス・コミュニケーションズ株式会社

〒100-0005 東京都千代田区丸の内3-2-3 富士ビル7階

www.cactus.co.jp | Tel: 03-6269-9550 | Fax: 03-4496-4557

※ ホームページ内お問い合わせフォーム又はお電話にてお問い合わせ下さい。

一般社団法人
大学出版部協会
加盟出版部一覧

北海道大学出版会
〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
北海道大学構内
TEL: 011-747-2308 FAX: 011-736-8605

弘前大学出版会
〒036-8560 弘前市文京町1
弘前大学附属図書館内
TEL: 0172-39-3168 FAX: 0172-39-3171

東北大学出版会
〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
東北大学構内
TEL: 022-214-2777 FAX: 022-214-2778

流通経済大学出版会
〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL: 0297-60-1167 FAX: 0297-60-1165

聖学院大学出版会
〒362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL: 048-725-9801 FAX: 048-725-0324

聖徳大学出版会
〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL: 047-365-1111 FAX: 047-363-1401

麗澤大学出版会
〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL: 04-7173-3320 FAX: 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会
〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL: 03-3451-3168 FAX: 03-3451-3124

ケンブリッジ大学出版局
〒140-0002 品川区東品川1-32-5
TEL: 03-5479-7295 FAX: 03-5479-8277

産業能率大学出版部
〒100-0005 千代田区丸の内1-7-12
サビアタワー9階
TEL: 03-6266-2400 FAX: 03-3211-1400

専修大学出版局
〒101-0051 千代田区神田神保町3-8
TEL: 03-3263-4230 FAX: 03-3263-4288

大正大学出版会
〒170-8470 豊島区西巢鴨3-20-1
TEL: 03-3918-7311 FAX: 03-5394-3038

玉川大学出版部
〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL: 042-739-8935 FAX: 042-739-8940

中央大学出版部
〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL: 042-674-2351 FAX: 042-674-2354

東京大学出版会
〒113-8654 文京区本郷7-3-1
東京大学構内
TEL: 03-3811-8814 FAX: 03-3812-6958

東京電機大学出版局
〒101-0047 千代田区内神田1-14-8
TEL: 03-5280-3433 FAX: 03-5280-3563

東京農業大学出版会
〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1
TEL: 03-5477-2666 FAX: 03-5477-2747

法政大学出版局
〒102-0073 千代田区九段北3-2-7
法政大学一口坂校舎内
TEL: 03-5214-5540 FAX: 03-5214-5542

武蔵野大学出版会
〒202-8585 西東京市新町1-1-20 武蔵野大学構内
TEL: 042-468-3003 FAX: 042-468-3004

武蔵野美術大学出版局
〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL: 0422-23-0810 FAX: 0422-22-8309

明星大学出版部
〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL: 042-591-9979 FAX: 042-593-0192

関東学院大学出版会
〒236-8501 横浜市区金沢六浦東1-50-1
TEL: 045-786-5906 FAX: 045-786-2932

東海大学出版会
〒257-0003 秦野市南矢名3-10-35
東海大学同窓会館3階
TEL: 0463-79-3921 FAX: 0463-69-3087

名古屋大学出版会
〒464-0814 名古屋市中千種区不老町1 名古屋大学構内
TEL: 052-781-5027 FAX: 052-781-0697

三重大学出版会
〒514-8507 津市江戸橋2-174
三重大学附属病院3階
TEL: 059-232-1356 FAX: 059-232-1356

京都大学学術出版会
〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69
京都大学吉田南構内
TEL: 075-761-6182 FAX: 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部
〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL: 072-941-9129 FAX: 072-941-9979

大阪大学出版会
〒565-0871 吹田市山田丘2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL: 06-6877-1614 FAX: 06-6877-1617

関西大学出版部
〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL: 06-6368-0238 FAX: 06-6389-5162

関西学院大学出版会
〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL: 0798-53-7002 FAX: 0798-53-9592

広島大学出版会
〒739-8512 東広島市鏡山1-2-2
TEL: 082-424-6226 FAX: 082-424-6211

九州大学出版会
〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内
TEL: 092-641-0515 FAX: 092-641-0172

大学出版93号 (2013年冬)
2013年1月1日発行
頒価100円 (〒共)

発行所:
一般社団法人大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替00170-8-389131
〒102-0073
東京都千代田区九段北
1丁目14番13号
メゾン萬六403号室
TEL: 03-3511-2091
E-MAIL: mail@ajup-net.com
URL: http://www.ajup-net.com/

使用書体:
ヒラギノ明朝, W4, W6
Adobe Garamond pro, Regular
使用紙:
紀州の色上質 特厚口 白

表紙デザイン:
白井敬尚形成事務所